平成29年度

のじぎく文芸賞

2017 Litterary Works

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会

発刊にあたって

県民の皆さまに主体的に人権について考え、作品づくりをとおして豊かな人権感覚を身につけていただくために実施してきた「のじぎく文芸賞」も、今年度で第二十四回を迎えました。第一回（平成六年度）の応募作品は九十二編。二十四回目となる本年度は、一六六二編のご応募をいただき、この二十四年間での応募総数は一七四三五編となります。県民の皆さまの人権問題への関心が高まり、広がってきたことを改めて実感せずにはいられません。

この二十四年の間に、少子・高齢化や情報化の急速な進展、人々の価値観や生き方の多様化に伴い、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化してまいりました。子どもや高齢者への虐待、いじめ、体罰、職場におけるセクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事件などの人権侵害は後を絶ちません。また、被災された人たちなど様々な人権にかかる課題もあります。さらに家族や地域、職場等での人と人とのつながりや支え合いが薄れる「無縁社会」と呼ばれる状況の拡大も大きな問題となっています。

兵庫県では、私たち一人ひとりがお互いの人権の尊重を感性として育み、日常生活の中で人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会をめざして、「人権文化をすすめる県民運動」を市町とともに展開しているところであり、「のじぎく文芸賞」も、その取り組みの一つです。人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られ、人権課題の解決に向けて明るい展望が描かれた数々の作品が、ひょうご人権ジャーナル「きずな」や市町の人権啓発冊子に掲載されたり、ラジオで放送されるなど、広く人権啓発に活用されてまいりました。

このささやかな冊子には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞八編を収録いたしました。多くの県民の皆さまにお読みいただくとともに、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民のみなさまの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりたいと存じますのでどうぞよろしくお願いします。

平成二十九年十二月

兵　庫　県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

平成29年度　人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

	氏名	作品名	部門（部）
〈最優秀賞〉	阿部忠彦	直子。また、前が向けた傷	小説（一般）
	塚口佳子	寄り添えば、笑顔あふれて	随想（一般）
	山内莉瑚	キグルミになりたい	詩（学齢児童生徒）
	山﨑眞由	ふみちゃんの木	創作童話（一般）
〈優秀賞〉	尾崎順子	旭町一班・姉ちゃんとめぐちゃん	小説（一般）
	鈴木優真	君の名前はまだ呼ばない	小説（学齢児童生徒）
	内倉一綾	思いやる気持ち	随想（一般）
	今西結花	さようなら　あくまのわたし	随想（学齢児童生徒）
	榊　れもん	雨やどり	詩（一般）
	圓山善久	さとうさん　ありがとう	詩（学齢児童生徒）
	田邉和代	あ・そ・ぼ	創作童話（一般）
	山脇愛理	ポワポワの魔法	創作童話（学齢児童生徒）

〈佳　作〉

小林良之　ありがとう　青春　小説（一般）
小倉康平　ふたりだけの応援団　小説（一般）
本木晋平　おおぐま座八〇番星　小説（一般）
川畑実生　嘘つき少年と童話少女　小説（学齢児童生徒）
村沢綾乃　障害なんて関係ない　随想（一般）
足利紗矢　いじめと向き合って　随想（学齢児童生徒）
難波　亮　挨拶は人と人とをつなぐ架け橋　随想（学齢児童生徒）
西本莉瑚　走れなかったリレー　随想（学齢児童生徒）
尾崎順子　支援教室の風のにおい　詩（一般）
岩井いづみ　花語り　詩（一般）
森本宝乃実　心の風船ふくらむよ　詩（学齢児童生徒）
山本快奈　灯籠　詩（学齢児童生徒）
石川純子　妹はファッションリーダー　創作童話（一般）
勢井美世　道しるべ　創作童話（一般）
岩田啓子　春の鍵　創作童話（一般）
山下治美　片眼のチンパンジー　創作童話（一般）

目次

【総評】……審査委員長……1
【部門別審査講評】……各審査委員……2
【最優秀賞・優秀賞作品】
《最優秀賞》
〈小説部門〉直子。また、前が向けた傷……阿部忠彦……19
〈随想部門〉寄り添えば、笑顔あふれて……塚口佳子……35
〈詩　部門〉キグルミになりたい……山内莉瑚……41
〈創作童話部門〉ふみちゃんの木……山﨑眞由……42

《優秀賞》

〈小説部門〉
（一般の部）
旭町一班・姉ちゃんとめぐちゃん……尾崎順子……49
（学齢児童生徒の部）
君の名前はまだ呼ばない……鈴木優真……61

〈随想部門〉
（一般の部）
思いやる気持ち……内倉一綾……75
（学齢児童生徒の部）
さようなら　あくまのわたし……今西結花……78

〈詩　部門〉
（一般の部）
雨やどり……榊　れもん……79
（学齢児童生徒の部）
さとうさん　ありがとう……圓山善久……80

〈創作童話部門〉
（一般の部）
あ・そ・ぼ……田邉和代……81
（学齢児童生徒の部）
ポワポワの魔法……山脇愛理……86

◆平成29年度応募作品の内訳

部門＼部	一般（高校生以上）	学齢児童生徒（中学生以下）	合計
小説	17	11	28
随想	72	1125	1197
詩	31	390	421
創作童話	12	4	16
応募総数	132	1530	1662

◆平成29年度審査委員

林　芳樹（総　括）　野元　正（小　説）　三浦　暁子（随　想）

時里　二郎（　詩　）　尾崎　美紀（創作童話）

総評

審査委員長　林　芳樹

パリに住む老画家を仕事で訪ねたときのことです。頼りは住所を書いたメモだけでした。教わった交差点までたどり着いたところで途方に暮れました。どの表示を見てもメモの通りがありません。立ちすくんでいると、高齢の女性が近づいてきました。

「どうしたの？」。その一言がどれほどありがたかったことでしょう。住所を見せ、たどたどしい英語で話すと、彼女は笑顔でアパートまでの道順を教えてくれました。

約束の時間に間に合い、用向きを終えた後、思ったものです。

さまざまな国から人々が訪れ、民族の入り交じる都市。その真ん中で困った外国人が目に入ると、「どうしたの？」。そんな市民文化が根づいているんだな、と感心したのです。

悩んだり困ったりしている人がいると声をかける。言葉を交わす。「のじぎく文芸賞」の入選作を読みながら、各作品の底を流れているキーワードは「言葉」だと思いました。たった一人で困ってしまったパリでの心細さを思い出しながら。

そういえば、詩部門の優秀賞となった「さとうさん　ありがとう」も買い物帰りのおばさんから「どうしたの？」と声をかけられた経験を書いています。泣きべそをかいていた子がその一言で救われたのです。

「人権」と聞けば肩に力が入ってしまいます。でも私たちが生きていくうえで大事にしたいことと思えば、少し肩の力が抜けそうです。みんながいつかどこかで経験したり感じたりしていることが、きっと「人権」とつながっています。

今回は４部門に計1662編の応募がありました。過去最多です。そこからえりすぐった入選作については審査委員の講評をお読み下さい。作者の思いをくみ取りながら審査を進めました。

この冊子が「言葉」の大切さをあらためてかみしめる機会になれば、と期待します。

部門別審査講評

【小説部門】

審査委員　野元　正

《審査総評》

今年度の小説部門の応募総数は、28編（一般の部17編、学齢児童生徒の部11編）であった。平成28年度の応募総数31編（一般29編、学齢児童生徒2編、）と比較すると、若干減少しているが、内訳を精査してみると、一般の部が減った分、学齢児童の部の増加が著しくほぼ昨年度に近いものとなった。テーマは昨年と違い、真正面から人権問題に取り組む、という作品は減少し、どちらかというと物語の中でさりげなく、「思いやり」「生きる大切さ」などテーマを多元的に浮かび上がらせていく傾向にある。その意味で作品の熟度は年ごとに上がっているように思えてならない。文学を通じて「人権」の大切さを現代社会の人々に伝えることは非常にむずかしいことだが、「人権」とは何か？とむずかしく考えるのでなく、作品を読むことで自然と何かを感じる作品や将来に光明を感じさせる作品に焦点を当てた。

〈最優秀賞〉

作品名「直子。また、前が向けた傷」　　阿部　忠彦

信二は母のパート収入だけの苦しい家計のため、習っていた大好きなサッカーを辞めさせられる。その苛立ちから級友里香を平手打ちしてしまい、止めに入った直子先生の腕に噛みつく。傍観を決め込んでいた直子はやがてその原因を知り、里香の母にあやまる。父のＤＶから逃れて生活する信二と彼の母の苦悩の実態を知り、ＤＶやいじめなどから眼を背けずに立ち上がる。小説として人物描写や物語の構成など巧みに描かれて読ませる佳品だ。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「旭町一班・姉ちゃんとめぐちゃん」　尾崎　順子

国数以外は姉ちゃんのクラスで勉強している特別支援学級のめぐちゃんは運動会の組体操の練習を嫌がる。クラスでは彼女の体力にあったポジションに変えるなど工夫して支え、見事にできるようになる。小学生の登校を見守る登校班の僕の姉ちゃんは僕には厳しいが、登校班の子たちにやさしく、いつもよく面倒をみている。

運動会当日、組体操は成功裏に終わり、退場のとき、準備班でトイレに行く暇のなかった、先頭の姉ちゃんが小水をもらし水溜まりができる。すぐ後ろを行進していためぐちゃんは小水の水たまりをものともせず歩いた。お陰で他の人に気づかれずに済んだ。

思いやりの連携が産んだ心温まる秀作だ。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「君の名前はまだ呼ばない」　鈴木　優真

何でも自分一人で出来ると思い上がっていた、ちょっとひねくれ気味の僕とそんな彼を諭す級友の咲来との心の交流を描いた哀愁に満ちた物語といえる。人権嫌いを公言し、人を支える素晴らしさ、人に支えられる幸せを知らない彼が事故で入院し、咲来は彼を連日見舞い、その思いやりにほだされ、次第に彼の頑な心に変化が起きる。そして彼は彼女の来訪を内心待ちわびるようになるが、彼はどうしても彼女の名前を呼ぼうとしない……。

内心とは違うひねくれ少年が、人間らしさに目覚めていく過程を描いた秀逸な作品だ。

〈佳作〉

作品名「ありがとう　青春」　小林　良之

合唱コンクールの優勝をめざす3年3組は、初め諍いのあった中で唯一ピアノを弾ける生徒と思われていた沙弥香の負傷から、伴奏ピアノの弾き手がいなくなり出場が危ぶまれる。

が、隠れた弾き手、前野との連弾できりぬける目途がつき、クラスの混乱も解消に向かい、合唱曲「木琴」に磨きがかかる。クラス一人ひとりの「おもいやり」が光る好編だ。

作品名「ふたりだけの応援団」　小倉　康平

家庭の事情で不登校気味の望月を励ますために、僕独りの応援団は廃部が危ぶまれていたが、倉田が入団して息を吹き返す。そして望月もレギュラーに返り咲き、試合でホームランを打つ。友の限りない応援は、教師安藤のパワハラ、アカハラをもはね返す。

ふたりだけの応援団の清々しさが印象に残る好編だった。

作品名「おおぐま座八〇番星」　本木　晋平

宇宙マニアというか、星好きのわたしはプラネタリウムが好きだったが、変態だ、とよくいじめられた。いじめはいじめでしかない。理屈も大義名分も要らないようだ。高校は青息吐息でどうにか滑り込んだが、落第点の赤点を取るなど卒業できるか不安だった。でも有意義な高校生活だったかもしれない。入学直後の試験で学年10番以内の宇野は、興味あることだけ勉強するタイプで、花や昆虫など博学で、詩や作曲にも精通していた。わたしと同じで組織で巧くやっていけるとは限らない、宇野とわたしは気があったようで互いに邪魔しない程度に付き合った。あるとき海辺で、二人で見た北斗七星は美し過ぎて悲しくなる。互いに孤独ゆえに相手の悲しさ、寂しさを知ることが

できる悟る佳品だ。

作品名「嘘つき少年と童話少女」　川畑　実生

図書館で知り合った月穂（男子）と夏季（女子）は互いに将来は小説家と童話作家をめざして心を通わせるものがあった。そんな夏季がＬＩＮＥ上でいじめのターゲットにされる。

しかし月穂は夏季を庇うことができず、知らないふりをする。夏季の自殺未遂、やがて転校。

何十年が過ぎ、夏季は売れてる童話作家。月穂は売れない無名の小説家。いじめを乗り越えたか、逃げたかを象徴するかのような再会だった。

ふたりの人生はいじめに傷つき、乗り越えられずに未だ彷徨う男と、傷ついたがそれを乗り越え、糧として生きる女の、身につまされる佳篇だと思う。

【随想部門】

審査委員　三浦　暁子

《審査総評》

平成29年度人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」の随想部門への応募総数は、1197作品であった。そのうち、一般の部は72作品。学齢児童生徒の部は1125作品である。平成21年度の随想への応募が194作品であったことを考えると、6倍近い作品をお寄せいただいき、有難いことと感じている。

このように応募数が増えたのは、関係各位の努力の賜である。兵庫県の人権関係者の広報活動により「のじぎく文芸賞」の存在がより広く知られるようになったのであろう。さらには小学校・中学校の先生方の作文指導への情熱にもお礼を申し上げたい。

取り上げられる題材も、いじめやインターネットの問題、認知症や老いのことまで多岐にわたり、人権問題が生活のすべてに関係していることを改めて感じた。

〈最優秀賞〉

作品名「寄り添えば、笑顔あふれて」　塚口　佳子

若年性アルツハイマー病の夫を介護しながら懸命に生きてきた作者。その努力には頭が下がる。さらに感心するのは、「私はこんなに頑張りました！」という大上段に振りかぶったような態度がないことだ。それはおそらく、夫の面倒を看ることをごく自然に喜びとして受け止めているからだと思う。

さらに、作者は老人施設の看護師の仕事も始めたというが、その申し出を「胸をときめかせ」て、引き受けたという。

豊かな表現力と、闊達な文章でつづられる、介護と労働の日々。春風が吹くように綴られた物語に涙が出た。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「思いやる気持ち」　内倉　一綾

電車の中で泣きわめく子ども。その子どもたちを注意するでもなく、ただ、呆然と見ているだけの父親。そういう場面に遭遇すると、多くの人は思うだろう。「しつけがなってない」と。

ちょうど乗り合わせた初老の男性が、たまりかねて注意すると、返ってきた言葉は思いがけないものだった。子どもたちの母親、つまり男性の妻が病院で亡くなったばかりで、どうしていいかわからないというのだ。

次の瞬間、車内の雰囲気が変わり、降りていく人たちは次々と励ましの言葉をかける。相手を思いやることへの難しさと複雑さを見事に描いた作品である。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「さようなら　あくまのわたし」　今西　結花

小学校の1年生でも、自分の思いを自分の言葉で打ち明けることができることを証明するような作品だ。

作者は3歳の弟をかわいいと思ってはいるが、時々、喧嘩もしてしまう。仲が良いときのわたしは「てんしのきもち」を持っているのに、喧嘩になると、「あくまのわたし」になってしまう。すると、弟の方もひどいことばかりしてくる。いつも「てんし」でいるように決心する様子がお姉さんとしての横顔を感じさせほおずりしたくなった。

〈佳作〉

作品名「障害なんて関係ない」　村沢　綾乃

発達障害を抱えながら、懸命に生きる作者。いじめられても母に打ち明けることもできない。他の人と違う自分を好きになれず、つらいだけの毎日。けれども、そんな作者を救ってくれたのは、仲良くしてくれる親友、支えてくれる先生、そして、強い絆で結ばれた家族の存在だ。

たとえ急に変わることができなくても、人を信じて生きていこうという思いが結局は自分を信じ、自分を救うことになる。

一生懸命さが文面から伝わってきて、幸福になってほしいと祈らないではいられない。

作品名「いじめと向き合って」　足利　紗矢

ぶりっ子がいじめの対象になることを私は知らなかった。少しおしゃまなだけだと理解していたからだ。しかし、作者は自他ともに認めるぶりっ子であり、そのためか人間関係がスムーズにいかず、苦しんでもいる。ただし、作者はいじめを花の成長にたとえ、種をまくからいじめの花が咲く、だったら種をまかなければいいと、考える。根本からの解決の提案だ。

いじめをゼロにするのは口で言うのは簡単でも、実行するのは難しい。けれども、あきらめず、友情の花を咲かせたいものだ。

作品名「挨拶は人と人とをつなぐ架け橋」　難波　亮

中学2年生になる作者が、小学生の時、いつも自分たちを見守ってくれた緑のおじさんへの思い出を感謝をこめて記した作品である。当時は当然のようにそこにいてくれる人として、深く考えずにいた作者だったが、毎日、かわいした優しい言葉を振り返ると、自分が守られていたことを思い出

す。

人は人によって支えられているものだが、残念なことに、時にはそれを踏みにじるような凶悪な出来事も起きる。そんなとき、私たちはとまどい、人をどこまで信じてよいものなのか迷う。それでも、「挨拶」を通じて、にじりよるように他人との距離を縮めていくしかない。

人の権利について、毎日、何が正しいのかを考えることが大切だ。

作品名「走れなかったリレー」　西本　莉瑚

リレーの選手に選ばれることを夢見て、練習していた作者。けれども、夢はかなわず、メンバーにはなれなかった。運動会が大好きな作者にとって、失望しながらの当日となった。なかなか素直に仲間を応援できない。

けれども、結局、もやもやをふっとばし、「行け～」と大声で声援することができたのは作者の成長を示すものだろう。微妙な心の機微がうまく描かれていると思う。

【詩部門】

審査委員　時里　二郎

《審査総評》

今年度も、多くの作品が寄せられました。

特に気づいたことは、作者自身の日常や日頃の生活のなかで、実際に体験したことを手掛かりにして書いている作品が、読み手の共感や感動を誘うということ。このことは昨年の総評でも述べたことですが、人権について、頭のなかで考えたことを書くだけでは、読む人の心を動かすことはなかなか難しい。自らの経験や体験から生まれた言葉は、それだけ人の心によく響くものです。今年度は、そんな作品を多く読むことができました。

気づいたことの二つ目は、人の心に寄り添うことの大切さに目を見開かされたこと。「キグルミになりたい」や「支援教室の風のにおい」などがその代表ですが、人を外から見ただけではわからない、人の心に寄り添ってみてはじめて見えなかったものが見えてくるということ。その人の眼差しに自分の眼差しを重ねてみることはそう簡単なことではありません。しかし、わたしたちに備わっている想像力と共感する力は、人とわたしとの間を隔てている壁を乗り越えるためにこそあるのではないでしょうか。そんなことを思いながら、作品を読みました。

〈最優秀賞〉

作品名「キグルミになりたい」　　山内　莉瑚

人に悪口を言われても、人にたたかれても、いつも笑顔でいる「キグルミ」になりたいと思っていた。「でも」と作者は立ち止まります。「キグルミがひとりになった時」のかなしみや孤独な心をキグルミの身になって想像してみます。そして、詩はここから一気に急展開します。「本当になり

たいのは／そんなひとりになったキグルミの／心と体に気がついて」「声をかけてあげられる人」。人の心は、外から見ていては気づかないところがあります。一歩踏み込んで人の心に寄り添ってみると、見えなかったものが見えてきます、気づかなかったことが多くあることに気づいてきます。

詩の作り方も、起承転結がきちんと考えられていて、人の心に寄り添うことの大切さが心に強く響いてきます。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「雨やどり」　榊　れもん

夏休みが終わっても学校に行けない。心も体も「ふらり　ふらふら」の状態で、家族が「聞きなれない日本語を駆使して」気遣ってくれるのも作者には痛いほどわかる。学校に行けないつらさは、雨のなかを傘もささずに、永遠にたどり着けない学校への道を歩いているつらさ。学校に行けないのではなくて、心のなかでは毎日、家を出て雨の中を学校に向かっているのです。ただ、学校はいつまで歩いてもたどり着けない。

「雨やどり」－この言葉が、作者の疲れた心をほぐしていきます。雨が止むのを待つこと。「なたね梅雨も／五月雨も」いつか止む。それまで雨やどりすればいい。町の図書館は雨やどりするのに静かで安心できる空間。こうやって、詩を書いたのも、おそらく雨やどりの図書館で「言葉」と出会ったからではないでしょうか。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「さとうさん　ありがとう」　圓山　善久

小学校一年生の作品です。夜、ママに塾に送ってもらったのに、台風の警報のために休みになっ

ていたことが塾の教室の前でわかり、あわてて戻ってきたのに、ママの車はもうなかった。心細くて不安に震えているのを見かけたおばさんが、親切に声をかけてくれ、家に電話をして、ママがかけつけてくるまで一緒にいてくれたのです。

その出来事を通して、人のやさしさや思いやり、人への感謝の大切さを作者は学んだようです。さらにはこの詩を読むわたしたちに、人の心の豊かさがどのように生まれるのかということも教えてくれます。

また、詩としても、ひとり置いていかれた不安や心細さ、ママが来てくれたときのほっとした気持ち、また「さとうさん」にあったときにお礼を言いたいという思いを述べるあたりの描写はこまやかで、作者の心の機微がよく伝わってくるすばらしい作品になっています。

〈佳作〉

作品名「支援教室の風のにおい」　尾崎　順子

何よりも、支援教室で学ぶ子どもに対する作者の深い愛情と、子どもひとりひとりに寄り添う心の姿勢に打たれました。子どもたちを、支援教室を吹き抜ける風にたとえ、ひとりひとりの個性や人間性を実によく見つめて、巧みな比喩を駆使しながら描き出しています。風といっても、ひとりひとり違う風。この教室に通う子どもたちの現実もひとりひとり違う。作者は彼らそれぞれに抱えている現実に寄り添いながら、子どもたちの気持ちをうべない、共感し、はげましていく。前向きで常に希望を失わない作者の愛情と情熱がいっぱいにあふれた作品です。

作品名「花語り」　岩井　いづみ

ノジギクは知られるように県の花。日本在来の固有種で、兵庫県以西の四国、九州の瀬戸内海の

沿岸あたりの山野などに自生する野菊の一種。姫路市大塩に自生地があるらしい。神戸市須磨区の横尾山には、大塩からゆずり受けたノジギクが季節になると一面に咲き誇ると聞きました。「潮風に吹かれて斜面を白い花で埋め尽くす」というのはこの横尾山のノジギクでしょうか。

バラやユリやヒマワリなど、豪華で派手な花に比べると、確かにノジギクは地味で目立たない。県の花だと知っていても、実際にはわたしも見たことがない。なぜ、そんなノジギクが、県を象徴する花として選ばれたのかを考えてみるとき、作者は「大地にしっかりと根を張り広げ／ささやかな自分を精一杯生きよう」とするノジギクの姿に気づいたというのでしょう。むろん、それはノジギクの生き方というよりも、わたしたちの生き方とも重ねられているのは言うまでもありません。

作品名「心の風船ふくらむよ」　森本　宝乃実

はずむ心が言葉をはずませます。詩のリズムは心のリズム。ピンクやイエローや金色の風船だけじゃなくて、ハート型やお星型や太陽や月の形の風船も。いやいやそれだけじゃない。「教頭先生」は「じてん型」の風船なのです。泣いている友達を見つけたときや、けんかをしたとき。なかでもおしまいにある「フワフワふくらむその気持ち　キックふれるとわれちゃうよ　われてはいけないその気持ち　皆でやさしくつつもうよ」というところ。心を風船にたとえるもう一つの意味が明かされています。

次々と湧き出してくる言葉をそのまま書きつけるのではなく、単調にならないように変化をつけて、きちんと組み立てを考えて書いているところ。とりわけ後半の十行あたりから、心のデリケートなありようまで触れているのはほんとうに感心させられます。

作品名「灯籠」　山本　快奈

作者はいじめの経験があったのでしょうか。あるいは、何かの理由で仲間外れになり、集団のなかでひとりぼっちで生きづらい体験があったのでしょうか。

この作品はそんなつらい体験のなかからみんなの仲間として笑いあえる存在になるまでを象徴的に描いています。

とくに「ぴと　ぴと　ぴと」とか「ぽつ　ぽつ　ぽつ」といった独特のオノマトペが、心の不安のなかで、友だちの一人が立ち現れてくるのに気づく作者の心のゆらぎや心のさわぎをよく表しています。気づきにくいところですが、「その手に僕の手を重ねてみた」という表現にあるように、独りぼっちから脱するきっかけは、友達のうながしに、作者自身が一歩踏み出したことです。「ああ温かい」という一行には、作者の全身からにじみだしてきた心のふるえが読む人の心に響く力がこもっているようです。

【創作童話部門】

審査委員　尾崎　美紀

《審査総評》

今回は応募数が少なく寂しい選考でした。「人権問題」という題がつくと、どうしても難しいと敬遠しがちですが、もともと児童文学というのは優しさの文学です。日頃の生活の中で、人と人とが思いやりを持つところから作品が生まれ、それこそが人権なのです。

数は少なかったのですが、今回の作品は優れたものが多かったように思います。しっかりと地に足を付けた作品には、想像力を湧き立たせる力があります。読み終わった後、心に涼やかな風が吹いて、明日も頑張ろうと力が湧いてきました。

〈最優秀賞〉

作品名「ふみちゃんの木」　山﨑　眞由

高齢化社会が進み、核家族が増えて、祖父母と同居する家も少なくなりました。入院中のひい爺ちゃんに、どうしても優しくなれない主人公が、生まれた時に植えてくれたというブルーベリーの木をきっかけにして素直になろうとする作品です。四世代の交流と共に、ささやかな暮らしの大切さを、甘ずっぱいブルーベリーの実が教えてくれます。ひい爺ちゃんが帰ってくるまで、枯らしてはいけないと奮闘する姿がいじらしく思えました。

〈優秀賞〉（一般の部）
作品名「あ・そ・ぼ」　田邉　和代

コミュニケーションというのは、お互いの意志を伝え合うことです。簡単なことのようですが、たとえば目や耳の不自由な人や、言葉の通じない外国の人と意志を通じ合うことはとても難しいことです。ある日、誰も知った人のいない、全く知らない町に放り出されたら、どうやって自分の気持ちを伝えるでしょうか？　「伝える」ことの難しさと、「伝える」ことが出来た時のうれしさと感動を、主人公は身をもって知ることになります。人はだれでもだれかとつながることができるのですから、勇気を持つことが大切です。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）
作品名「ポワポワの魔法」　山脇　愛理

迷子になって心細いハリネズミのハリスは、うさぎのラビアンに助けられながらお母さんを探します。町は人でいっぱいの上、とんでもないハプニングが起こったりします。そんな中、二人は、困った人たちを助けると心がポワポワすることに気がつきます。「ポワポワの魔法」でお母さんを見つけることができたハリスは、ちょっと大人になったのかもしれません。実は、ラビアンも迷子だったというオチには思わず笑ってしまいました。十枚もの枚数を飽きさせずに読ませる力はすごい！と思いました。

〈佳作〉
作品名「妹はファッションリーダー」　石川　純子

病気や事故で髪の毛を失った子どもたちのウィッグを作るために、髪の毛を寄付するヘアドネー

ションという制度を知ったのは、最近のことです。主人公の妹のために、なんとかウィッグをこしらえようと、おばあちゃんの知恵を借りて頑張る主人公には頭が下がります。おばあちゃんの髪の毛をヘアバンドにするというアイデアで、妹は七五三を迎えることができました。妹の着物とウィッグが人目を引きますが、それをファッションリーダーだと言う主人公の強さと優しさに惹かれました。

作品名「道しるべ」　勢井　美世

友情というのは、時には煩わしいこともあります。仲良しであればあるほど、ちょっとしたことで疑心暗鬼になったり、悩んだりします。主人公は、急によそよそしくなった親友を最初はなじりますが、その理由を知って自分の心の狭さに気付きます。親友の母親の目が不自由になったことを知り、点字ブロックの重要性をクラスメートにも分かってもらおうと努力する姿に心を打たれました。

作品名「春の鍵」　岩田　啓子

待ち遠しくてたまらないお雛祭りの準備は、小さな妹の出現で大事件になってしまいます。待てど暮らせど帰ってこないお母さん。琴子は一人で飾ってしまおうとしますが、ひな人形の箱の蓋が開きません。あせってもあせっても時間ばかりが経っていきます。その時、不思議な女の子が手まりをつくと、ポンと桃の花のつぼみが開きました。琴子が手まりを放り上げると、心の中でカチッと鍵の開く音がします。思いやりを忘れていたことに気付いた時、箱の鍵も心の鍵も開いたのです。春の香りがする優しい作品でした。

作品名「片眼のチンパンジー」　山下　治美

片眼の不自由なチンパンジーをからかう仲間に、その不自由さを知らしめたボス。けれど手を差し伸べる事だけが、彼のためにならないことも諭します。不自由な中で、一生懸命頑張る彼と、それをそっと見守る仲間たち。一つのことを成し遂げる困難と、それを乗り越えた時の喜びは、皆の喜びになりました。助け合うこと、見守ることの大切さを教えてくれる作品です。

最優秀賞

《最優秀賞》

小説部門

直子。また、前が向けた傷

阿部　忠彦

「えー、信二君、また宿題忘れたん。何でやの。あれだけ言うたやん。忘れんときよって。何で、何で忘れたん」

「うるさいわ」

板書をしていた直子が、里香の泣き声に振り返ったときには、もう遅かった。里香の頬には、きれいに信二の手の痕(あと)がついていた。

「何やってるの」

直子はすぐに駆け寄って、信二の両腕をつかんだ。

「君が苛々(いらいら)してるのは分かる。でも、人に当たったらあかん。暴力を振るうなんてもってのほかや」

「うるさい。どうせぼくなんか。何やってもあかんねんや。勉強もできへんし、運動もできへん。放っといてくれ」

信二はそう言うと、いきなり直子の右腕を噛んだ。

「痛い」

直子が思わず手を放したすきに、信二は喚(わめ)きながら教室を飛び出していった。

「先生、ぼく、信二君探してきたろか」

「ほっとき。女の子に暴力ふるう子なんて、最低や。もう帰ってこんでもええ。このクラスの子と違う」

立ち上がりかけた二・三人の男子を、直子はいつになく激しい言葉で制した。腕には激しい痛みとともに信二の歯形がくっきりと残っていた。

「鬼や。先生、久しぶりに鬼になってる」

ささやく声が耳に届いたが、直子は無視し

て里香に話しかけた。
「里香ちゃん。ごめんな。痛かったやろ。信二君なあ、苛々してるねん。その苛々を放っておいたのは先生やねん。だから、信二君が手を出したのは、先生にも責任があるねん」
頭を撫でると、机に突っ伏して泣いていた里香が顔を上げた。
「信二君、習ってたサッカーを辞めさせられたんやろ。里香もクラスのみんなも知っててん。それが理由で勉強も宿題もせえへんねんやったら、一緒にやってあげよって思って、何べんも声かけたの。クラスの男の子らも休み時間にサッカーやろうって、信二君に声かけてたんよ。でも、信二君が素直に聞いてくれへんかって……。私がしつこく言い過ぎたから……。それで切れてしもたんやわ」
「そうか。そうか。里香ちゃんもみんなも優しいな。ええ子ばっかりやな。信二君も先生も悪かったなあ。ごめんな」
直子は、子どもたちを見回しながら謝った。

信二がサッカーチームを辞めさせられたと聞いたのは二学期が始まってすぐ、もう十日も前のことだった。それが原因で苛ついて、勉強に身が入らず生活態度もいい加減なものになっていた。直子ももちろん気がついていた。だが、信二には何も指導をしなかった。
信二は一学期の途中に転校してきた。転校の理由は父親のＤＶ。未だに父親から逃げ続けている。もう、何年になるのだろう。信二がこの学校にいることは、学校としても最大限配慮すべき秘密のひとつになっていた。
信二親子は、母親のパート収入だけで生活している。金銭的に苦しいため、習い事のひとつだったサッカーを辞めさせたのだろう。だが、それは直子が口を出すべきことではない。「辞めさせられたことが原因で苛ついていますから、もう一度習わせてやってください」などと言えるものではない。金が絡むと担任が口を出すのは難しい。だから、直子は敢えて指導せず、十日間も放置してしまった

のだ。里香やクラスの子どもたちは苛つく信二をなだめ、勉強もサッカーも一緒にやってくれていたというのに。

あれこれ自問しているうちに、直子は気がついた。自分は逃げていたのではないかと。金とDVが絡んでいる。信二を指導することでトラブルに巻き込まれるのではないか。どうせ、自分が出て行っても解決できる問題ではない。だから、信二はそっとしておこう。子どものことだ、時が経てば忘れてしまうだろう。そんな、事なかれ主義の逃げの姿勢が、こんな事態を引き起こしてしまったのではないか。

「おい直子。四月の意気込みとえらい違うじゃないか」

どこかで、父母の声が聞こえたような気がした。

「よし」

直子は腹をくくった。たとえ、金銭やDVが絡んでいても、担任としてできることが必ずあるはずだ。まだまだ新任。行動力だけが自分の取り柄だ。守りに入ってどうする。里香の母親にも信二の母親にも会おう。とことん信二と付き合ってやる。

気持ちに踏ん切りを付けると、直子の行動は早い。子どもたちに自習を言いつけて信二を探した。プールの裏に居た。何かあった子どもはたいがいここに来る。職員室からも、周りの民家からも死角になっているからだ。

信二は膝に顔を埋めてしゃがんでいた。直子も隣りに座った。何も言わずに体ごと抱いてやった。その途端、信二が泣き出した。

「泣き。思いっきり泣き。ごめんな。信二君。君の悩んでるの放っておいて、ごめんな」

信二は、いっそうしゃくり上げた。

「先生、ごめん。ぼく、ぼく……」

後は言葉にならなかった。

「ええの、ええの。何も言わなくてもええの。泣くだけ泣いて、もうええと思ったら、教室に帰っておいで。それで里香ちゃんに謝ろ

う。何があっても手を出したのは、信二君が悪いねんからな。きちんと謝ろな」
まだ三年生。こんな小さな体に金の問題やDVなど、自分ではどうすることもできないことを抱え込んで泣いている。自分の胸の中で泣いている。直子の頬を伝った涙が信二の頭に落ちた。
直子は、まだ泣き止まぬ信二を残して教室に帰った。
「どうやった」
子どもたちが口々に聞いてきた。
「ああ、今、泣いてる。信二君も男やからなあ。泣いてるところは見られたくないやろ。すっきりしたら戻ってくるわ」
直子はわざと軽く言った。
信二が帰ってきたのは、次の時間が始まってすぐだった。
「里香ちゃんごめんなさい。叩いてしまって。もうしません。許してください」
信二は席に座る前に深々と頭を下げた。
「うん。分かったよ」
そのとき、後ろの扉が静かに開いた。
「あっ、幸ちゃん。お帰り」
クラスの子どもたちが口々に言った。
特別支援学級「なかよし」から、田中幸助がやってきたのだ。幸助はベッドに寝たままだ。「アーアー」としか言わない。四月から毎日一時間、直子のクラスに来ている。子どもたちは幸助が来ると「お帰り」と言う。最初は「いらっしゃい」と言っていたのだが、どうもお客さんみたいだと考え、直子が「お帰り」に改めさせた。一時間、子どもたちと過ごして、また「なかよし」に戻って行く。幸助の担任の中本は定年前だが、ベッド状の車椅子を押して学校中どこへでも移動する。ちょっと太っているが、疲れを知らない先生だ。
「授業の途中に済みません。どうぞ、続けてください。うん?。あれ、何かあったのかな」
中本はいつもの場所にベッドを固定させな

がら言った。
「アアー、アアー　アーアー」
いつもは静かに授業を聞いている幸助が、声を上げ続けた。
「河上先生、みんな、ごめんな。ちょっと幸ちゃん、興奮してるみたいやわ。一周してからまた来るわな」
中本は車椅子を押して出て行った。直子は、幸助が声を上げ続けたのは、いつもと違うクラスの雰囲気を感じた取ったせいかも知れないと思った。
「さあ、じゃあ、授業始めようか」
直子はことさら明るく言ってみた。だが、クラスの暗い雰囲気を変えるのは難しかった。
放課後、信二を連れて里香の家に行った。立派な家だった。震災の後に建て直したのだろうか。呼び鈴を押すと、母親と里香が玄関に現れた。
「さあ、信二君。もう一度謝りなさい」
来るときからつないでいた手に力を込めて促した。
「ごめんなさい。もう、しません」
信二は手をつないだまま深々と頭を下げた。
「信二君、もう手を出さないでね。何でもお話で解決しましょうね」
母親の言葉に、信二は深くうなずいた。
「河上先生。信二君、習い事を辞めさせられてむしゃくしゃしていたんですって。先様は習い事にも通わせられないくらいお困りなんですか？　おかわいそうですこと。少しぐらいのお金ならカンパもできましてよ」
「それはちょっと、子どもの前では…」
「そうよね。こんな話、子どもの前ではね。でも先生。今度また、こんなことがあったり怪我をさせられたりしたら、ただでは済みませんわよ。女の子なんですから。先生が止めさせられないんだったら、教育委員会でも裁判所でも、出るところへ出ますから。向こう

のお母様にもよろしくお伝えくださいましね」
「ママ。私もしつこく言ったから悪いのよ」
　里香が母親の手を引っ張った。
「私が信二君の気持ちをコントロールしてやれなくて、放っておいたことが、手を出した原因なんです。私の責任です。今後、このようなことがないように気をつけます」
　直子も頭を下げた。
「あら、先生に責任はないわよ。先生は未婚の独身、子育て経験なし。しかも新任。言葉は悪いですが、謂わば『世間知らずのお嬢様』でいらっしゃいますもの。それに、躾は家でするものですわ。学校ではできませんわよ」
　里香の母親はホホホと笑った。うつむいて話を聞いていた直子の胸の深いところで、ブチッと何かが切れる音がした。唇を引き結んで顔を上げた瞬間、里香の笑顔が目に飛び込んできた。それに、信二とつないだ手からは温もりが伝わってきた。
（何様のつもりやねん）
　直子は、口から飛び出そうになった言葉を寸前で飲み込んだ。
「はい。申し訳ありませんでした」
　直子は、また頭を下げて声を絞り出した。悔しくて涙が出そうになったが、それにも堪えた。泣いたら負けになる。里香の母親に負けるのではない。金やＤＶという信二が抱える問題に負けてしまうのだ。担任の自分が負ければ、信二も負けてしまう。自分が精一杯考えなければ。こんなことで腹を立てている場合ではない。耐えるところは耐えよう。
　ただただ頭を下げ続けて、里香の母親を納得させた後、信二の家へ向かおうとしたが、信二は家とは違う方向へ直子を引っ張っていった。
「どこへ行くの？　家の方向と違うやん」
「この時間、お母さんはパートで働いてる。アパートには居らん」
「そうか。お母さん、朝から晩まで働いてる

んやなあ。偉いお母さんやなあ」
「里香ちゃんのママみたいにスカートは穿(は)いてないけどな。偉いし美人やで」
得意そうに直子の顔を見上げた信二は、もう笑顔になっていた。直子も笑顔で返そうと思ったが、頬が強ばっていてうまく笑顔を作れなかった。里香の母親の言葉が胸に刺さっていたからだ。
『未婚、独身、子育て経験なし。世間知らずのお嬢様』
悔しいが、自分は母親に言い返せるだけの実績を残していない。今も信二や里香だけでなく、クラスの子どもたちにも辛い思いをさせてしまっている。それもこれも、信二の心の痛みに寄り添おうとせず、無難にやり過ごそうとした自分のずるさが原因だ。
「逃げるな」
直子は、信二に聞こえないように気合いを入れた。
スーパーに着くと、信二は直子の手を放して中へ走って入った。直子がついて入ろうかどうか迷っていると、すぐに出てきた。
「四時になったら十五分だけ休憩があるんやて。それまで公園で待っててって」
時計を見ると、まだ三時過ぎだった。信二は再び手をつなぎにきた。直子を独り占めできるのが嬉しいようだ。二・三分歩くと公園があった。
「えっ、公園って、この公園のこと」
「えっ、先生、この公園来たことあるの」
「うん」
いつも来る道とは、違う道を来たから分からなかったのだ。紛れもない。父母と直子、三人家族が暮らした家の跡に作られた公園だ。いつものように楠が涼しい木陰を作っている。二人でブランコに腰を下ろした。
「信二君、放課後はいつもここに居るん?」
「うん。この頃はな。前は、近所にある『ここから』いう所に居った。お母さんが、そこへ行っときって言うたからな。でも、いやや

ねんなあ」
「何で？」
直子も『ここから』の話は聞いたことがある。地域の老人たちが主催している子どもたちの居場所、キッズスペースのことだ。
「友だちもいるし、おじさんやおばさんが世話してくれるんやろ。本も読めるし宿題もできる。おやつももらえるんと違うの」
「先生。けど、ぼく、お母さんのことが心配でしゃあないねん。どこかへ連れていかれてしまわへんか、心配でしゃあないねん。だから、じいっとあそこで座って勉強しとられへんねん」
信二は母に対する父の暴力を目の当たりにしてしまったのかも知れない。二人っきりでひっそりと生活する信二にとって、母親はすべてだ。母親に何かあったらと思うと、じっとしていられないのだろう。
「ここに居ったら、ちょっと走ってスーパーに行って、お母さんの顔が見られるやろ。お母さんが働いてるところ見たら安心するねん。それに、ぼく、一人で遊ぶのに慣れてるし」
直子は、何も言えずにゆっくりとブランコを揺らした。すると、幼稚園の頃しつこく祖母にごねたときのことを思い出した。
「お母さんとお父さんがほしい。どこかで買ってきて」
それは、女の子が両親の手にぶら下がって足を泳がせて歩いているのを見たり、お父さんの肩車で人垣の向こうを見ていたりするのを見た後だった。直子がぐずるたびに、祖母は直子をきつく抱きしめた。
「ごめんな。ごめんな」
祖母はそれしか言わなかった。もちろん、直子も祖母に無理を言っているのは分かっていた。父母は震災で一度に亡くなってしまったのだから、再び会えることなどない。だが、一年に何度か、そうごねずにはおられないときがあったのだ。

「先生なあ。お父さんもお母さんも居らへんのよ。大きな地震で亡くなってな。先生だけが助かったの。先生はお母さんの顔もお父さんの顔も覚えてないの。まだ赤ちゃんやったから」
「ぼくぐらいのとき、寂しかった？」
「うん。寂しかったよ。めちゃくちゃ。今でも寂しいて泣くときがあるんやで」
「ふうん。ぼくのお母さんは、ぼくが泣いてたら抱っこしてくれるで。お母さんに抱っこしてもろたら、すぐに眠れるんやで」
「ええなあ。お母ちゃんがおって」
信二は嬉しそうにうなずいた。
とりとめもなく話をしていると初老の男性が公園に入ってきた。
「やっぱりや。よう似てるなと思ったら信ちゃんやないか。このごろ『ここから』に来（こ）うへん思たら、こんなところにおったんかいな」
「こんにちは。信二君の担任の河上といいます。おたくは…」
直子は、ブランコから立ち上がった。
「おう、担任の先生ですか。私、『ここから』をやってる荒木と言います。いうても、公に認可されてる訳やない。近所の定年過ぎてすることない者が集まって、当てもなく遅い時間までぶらぶらしてる子ら集めて、宿題させたり将棋や碁やらせたりしてるだけなんですけどね。だんだん人数が増えましてな。それにしても先生、何でまたこんな時間にこんなところへ？」
「信二君が女の子を叩いてしまいましてね。それで謝りに行ってきた帰りです。お母さんにも事情を話しとかなあきませんし…」
「そうですか。そらあよう頑張ってはりますなあ。電話やメールで済ます先生も多いのに」
「今からお母さんと話をするんですけど……。習い事のサッカーを辞めさせられてちょっと苛々してたのを、私が指導せずに見

過ごしてしまっていて……」
「そうか。信二君はサッカー選手になるのが夢やったもんなあ」
「うん。でも、どうせぼくなんか。下手くそやし。ちょうど良かってん」
直子の心臓がひとつ大きく鳴った。
「子どもやのに何言うてるの」
直子と荒木が同時に言った。二人で顔を見合わせた。
「その通りです。荒木さん」
直子はしゃがんで信二の両腕をつかみ、向き合った。しっかり伝えておかなければならない。信二の目を見つめた。
「信二君。『どうせぼくなんか』って言うてたら、できることもできなくなる。人には必ず『ぼくやからこそできる』ことがある。これからは、ぼくやからこそできることを探すの。そのために勉強してるんやから」
「ふうん。『ぼくやからこそできること』か。何か言葉に出して言ったら、元気が出てくるな。先生。できることが何かは分からんけど」
信二は嬉しそうに笑った。
「若いのに、ええこと言う先生や」
「そやろ。おっちゃん。ええやろ。ぼくの担任や。河上直子先生いうねんで」
信二が自慢げに言った。
「へへへ」
直子はちょっと目を細めて微笑んだ。
「ちょっと待って。河上直子て、ひょっとしてお父さんは河上哲人先生でお母さんは春子先生かいな」
「ええ。父と母をご存じなんですか」
直子は大きな声を上げてしまった。
「知ってるも何も。お父さんは、わしらの地区の出身でな。先生になってからも、夫婦して夜や休みの日に地区の公民館で子どもらに勉強教えてくれてはったんや」
直子の頭に、写真でしか見たことのない父と母が、子どもたちに勉強を教えている姿が

浮かんだ。
「そう言えば先生の家はこの辺りやったなあ。ほな何か。あのとき、つぶれた家の中から、わしらが助け出した赤ちゃんが、あんたか」
「はい。あの時助けてもらったのが私です」
直子の目から涙があふれてきた。
「そうか。そうか」
荒木も溢(あふ)れてくる涙を腕で拭(ぬぐ)った。
「河上先生夫妻の娘さんやったら、ええ先生に違いないわ。子どもらも親も安心や」
「いいえ。今も親に、先生は『世間知らずのお嬢様』やいうて叱られてきたところです」
「ええがな」
荒木がにこにこしながら言った。
「ええ、叱られてもしょうがないんです」
「違うがな。世間知らずがや。先生は世間知らずでちょうどええ。先生が世間ずれしてたら子どもに正しいこと教えられるか？　先生が世間知らずの混じりっけのない純粋な心で子どもに接するからこそ、子どもは真っ直ぐに生きていけるし、生きていこうと思うんや」
直子の心がすうっと晴れ上がった。
そうか。そうだったのだ。今度のこともっと純粋に考えればよかったのだ。信二と一緒に考え、一緒に悩み、泣いてやれば良かったのだ。解決できるかできないかは問題ではない。いや、家庭の問題は解決できないことの方が多いだろう。だが、子どもの心に寄り添うことで心の負担を和らげることができるはずだ。そうするためには、こちらが、より純粋でなければならないのだ。これから『世間知らず』と言われたら、褒め言葉と捕らえよう。
「直子先生のお父さんとお母さんは、子どもらの悩みにじっくり向きおうてくれはった。遅うまでなあ。学校が荒れてる頃やったから、大変やったと思うわ」
父や母は自分のように逃げなかった。
「酒を飲んだら、どうしたら子どもたちに夢

や希望を持たせられるんやろって、ずっと言うてはったんやで」

父母は勉強を教えながら子どもたちの未来を見据えていたのだろう。今している勉強は、自分の未来のためにある。そんな父母に教えてもらった子どもたちは、辛いことがあっても自らの力で心の傷を修復し、立ち上がっていったにちがいない。

「わしら河上先生のようにはできん。満足なことはようせん。でもな、わしらのところに居る間はいじめも非行もさせへん」

「ありがとうございます。地域で子どもたちを見守っていただけたら、ほんまに助かります」

直子は涙を拭きながら言った。

「済みません。先生。遅くなって」

母親が公園に入ってきた。

「忙しいのに済みません」

直子は単刀直入に今日の出来事を話した。

「サッカー辞めさせられてから、信二君、苛ついてましてね。勉強もせえへんなって。隣の女の子が一緒にやってあげよう思って、宿題のことをしつこく言うたんです。それで、辛抱できんと手が出てしまいました」

「済みませんでした。今晩にも謝りに行ってきます。顔に傷つけたりしてませんか」

母親は直子の顔を覗き込んだ。

「それは大丈夫です。それよりお母さん。差し出がましいようですが、苦しいようなら市の生活保護制度もありますから、受けてみられたらどうですか。助かると思いますよ」

頑張っている信二のお母さんのような人にこそ、保護制度を活用して欲しいと思った。

「ありがとうございます。でも、市役所に行って手続きすることで、夫に居場所が知られてしまうんやないかと心配なんです。いろんな事件があるでしょう」

「大丈夫ですよ。学校や市を信用していただいて、相談にだけでも行かれたらどうですか」

直子はなおも勧めた。

「先生、私、大学出てるんです。二十七歳で寿退社。結婚してすぐこの子ができました。人生順風満帆にいくはずやった。でも、主人がリストラに遭って…。それからお決まりのコース。鬱、酒、DVです。この子を守るのに必死でした。この子が四歳になるまで我慢したんですけど、あきませんでした。真夜中に着の身着のままで逃げました。友だちの家を泊まり歩いて、ようやく見つけたのが今のアパートです。仲の良い友だちが近くに住んでいて庇ってくれてるんです。まだ離婚の裁判もきちんとできてません。大学を出ていてもだめですね。じっくり大きな会社の入社試験受けて、もう一度正社員に……、何て思ってもでけへん。たかが何千円かのことなんですけど、信二には辛い思いをさせました。この子、怖いんです。四歳頃のことやから覚えてないって思ってたんですけど、そうやなかった。いっつも私の顔見に来るんは、ほんまにスーパーに居てるかどうか、父親に叩かれてないかどうか見に来てるんです。目が合って笑ってやると満足して、またここに来て一人で遊んでるんです。自分では、私のことを守ってるつもりなんやと思います。そやから、先生、もう少し落ち着くまで、今のままこの子と二人で頑張ります」

「お母さん。学校での信二君のことは任せておいてください。この子がきちんと将来の夢を描けるようにしますから」

「ありがとうございます。お任せします。ええ先生で良かったです」

母親はにっこりと笑った。えくぼが出た。

次の日、クラスで大事件が起こった。信二が休み時間に誰にも遊んでもらえなかったのだ。その上、給食の時間にはひとりぽつんと食べさせられていた。直子はすぐに改まるだろうと思って何も言わずに我慢していたが、とうとう五時間目の始めに爆発してしまった。

「みんな。今日は信二君のこと無視してるよな。席も離してるし。それっていじめなんやで。分かってる？　分かっててやってるの」
声がだんだん大きくなってしまった。直接感情をぶつけてはいけないと分かっていながら激高してくる自分を抑えられない。いじめは何があっても許さない。小学校での取り組みこそが中学、高校に生きてくる。何がいけないのか徹底的に教えなければ。
「先生。昨日、信二君は里香ちゃんの顔を叩きました。暴力を振るう子はだめです」
委員長の晋也がすっくと立って言った。
「それがいじめの理由なの。だったら、おかしいよ」
「でも、先生も言うたやんか。暴力振るうような子は、このクラスの子と違うって」
「そうや。そうや」
直子の勢いに負けて、今まで黙っていたクラスの子たちが同調しだした。
紅潮していた直子の顔面から血の気が引いていった。確かにそうだった。感情に任せて口から出てしまったのだった。
「ごめん。悪かった。それは先生が悪かった」
直子はそれだけ言って、しばらく頭を下げていた。晋也がゆっくり座った。それに合わせるようにざわめきが収まった。直子はゆっくり顔を上げた。直子の目に三十人のじっと自分を見つめてる顔が映った。
「それでもね。いじめはだめ」
納得していない子どもたちは、直子から視線を外さない。
「そうか。分かった。詳しく言うよ。いじめはいじめられる原因があればいじめても良いっていうものじゃないの。いじめるということ、それ自体がいけないことなの。人としてやったらあかんことなの。それにね。いじめる理由っていじめる側が勝手に作ってるだけなの。自分の都合の良いようにね」
里香が立ち上がった。

「みんな。私は直子先生の言うことが良く分かる。信二君に叩かれたけど、信二君には信二君なりの叩く理由があったやん。でも、今日、信二君をいじめてるのは、信二君は女の子を叩く悪い子やって決めつけていじめてる。それっておかしいわ。先生が言うたように、私らが勝手に作ったいじめるためだけの理由やわ。それに信二君にだって良いところがたくさんある。悪いところばっかり言いあいしていじめるより、良いところを褒(ほ)め合う方がよっぽど良いと思うわ」

子どもたちが隣近所で顔を見合わせてうなずき合いだした。

「そうか。ぼくもいじめられたことがあるけど、ある日突然、誰かが言い出して始まって、いつの間にか終わってしまう。だから、そのときのいじめる理由なんてたいしたことないんやで。みんなすぐ忘れるもん」

「そうや。のけ者にしたり、机離したり、そんなせこいことは止めよう」

何人かが発言して、他の子たちも納得した。

「けど…」

晋也がゆっくり立った。

「里香さんが良いとこ見つけて褒めあおうって言ったけど、信二君の良いとこってどこや」

信二は下を向いてしまった。

そのとき教室の後ろのドアが開いて、田中幸助が入ってきた。

「あれ。また、大事なところに入ってきてしもたかなあ」

中本がにこにこしながら言った。

「アーアーアー」

幸助が声を上げた。

「幸ちゃん元気ないなあ。中本先生。幸ちゃん、何かあったん」

信二が立ち上がって声をかけた。

「おお。さすが信二君。今朝着替えるときにぐずって、お母さんに叱られたんや」

「それや」

里香が大きな声を上げた。

言ってみた。また、前が向けた。

「それやんか。信二君の良いところ。幸助君の気持ちが分かるところや。すごいやん。だって、アーアーアーだけで、その日の気分が分かるんやで。私ら分からへんもん」

「ほんまや。信二君、すごいなあ」

晋也が納得して、信二を褒めた。クラスのみんなが拍手した。

「げへへへ」

信二が頭を掻いた。

次の日、信二は久しぶりに日記を書いてきた。日記には、こう書いてあった。

「先生見つけたよ。『ぼくやからこそできること』。こうすけくんの世話をすることです」

感想を書こうとして赤ペンを持つと、信二に噛まれた傷が目に入った。直子は噛まれた痕を撫でた。大事なことに気づかせてくれた傷だ。何だか愛おしいとさえ思えた。

「ふふっ。これからも頑張れそうだよ。お父さん、お母さん」

誰もいない放課後の教室で、声に出して

《最優秀賞》

随想部門

寄り添えば、笑顔あふれて

塚口　佳子

「老人施設の看護師をお願いできませんか」

七十五歳も残りわずかとなっていたこの春、その打診を受けたとき、私の胸はときめいた。若年性アルツハイマーの夫が、在宅から施設入居という変化を余儀無くされて一年になる。以来、一日二回、朝夕の面会は今や私の日課となっているが、その老人ホームは、かつて看護師として勤めた私の職場でもあった。

入居者家族として面会に通う私の胸には、もう一度白衣を着たいという思いが潜んでいた。

沿道の桜並木がすっかり葉桜となった五月、施設の誘いに応じ、私は新しい職場を得た。そのグループホームの訪問医の往診に立ち会うことと、同じ施設内のデイサービスの看護を時に兼ねるという勤務条件に無理はなく、若い施設長の笑顔が私の背を押してくれた。

グループホームには、十八名の入居者さんがいる。平均寿命の統計にも見られるように、ここでも男性はわずか二名で、リビングルームはいつも、女性達の集いの場のようである。年齢が近いということもあってか、そんな入居者さん達はすぐに私に馴染まれて、親しみを抱いて迎え入れてくださったようである。

往診の日、医師に会えるとあって、みんなの表情は明るい。順番が来るのを今や遅しと待ち、医師の前に座るとその手を握って離さないKさん、戦時中の苦労話をいつも繰り返

すSさん、励ましの医師の言葉に感動して合掌するFさん、その日、フロアで目にする情景はいつも変わることなく、「あんた男前やねえ」と褒められた医師の笑顔も温かい。

「今日もお元気ですよ」との医師の言葉はすぐに忘れても、認知症の入居者さん達の胸には、その言葉の温もりがきっと届くだろう。

その温もりは、デイサービスの場にもたっぷりとあることを感じたこの四か月を思う。朝九時過ぎ、送迎車が到着すると、デイサービスのフロアは一気に活気づく。利用者さんの多くが杖をつき、車椅子の人もかなりいる。毎日利用する人、週に数回の人などの違いはあっても、顔馴染みの仲間に会えた元気な声が飛び交う。独居の人も多い状況だが、そんな人達の貴重な触れ合いの場がここにはある。そんな中、血圧計と体温計を手にした私の、心はずむ朝が始まる。それぞれの肩に手を触れ声をかけて回ると、たまにしか会えない私にもいい笑顔を見せて応じてくださる。若い介護スタッフの中で働く私を気遣ってか「奥さんにお世話になるなんて申しわけないわ」と、最初は遠慮されたMさんも、今ではもう「看護婦さん、次の週もまた会えるかしら」と笑顔である。「転んだら危ないから駄目よ」とスタッフから注意されても、少し踵の高い靴を履くHさんは、ブローチやネックレスも光らせていて若い頃の名残を見せている。

調理員の手作りの昼食を摂り、入浴をし、ぬりえやゲームを楽しみ、雑誌を読み、夕方まで仲間との触れ合いの中で過ごされる人達。入浴にも、排泄にも、食事や口腔ケアにも、孫ほどに若い介護スタッフの手を借りなければならない人達であるが、介護者の温かい手とやさしい言葉が届けてくれる安らぎの大きさは、老いゆく私の胸にも伝わってくる。

夕方、送迎車から手を振り、笑顔で帰って行く人達を見送るとき、この心には充実感が広がってゆく。朝、「今日は行かない」と家族

さんを困らせたというIさんの、日本晴れのように明るい笑顔もその中に見られる。わずか七時間ほどであっても、その日、仲間達と触れ合い、介護スタッフと触れ合い、そこから得た温もりを抱いているからこそ、これほども晴れやかに帰って行かれるのだろう。

それは、グループホームにおいても言えることだと思う。十八名の入居者さん達の住まいはホームの建物だ。それぞれの事情があって、もう帰られる家はない。限られた空間での限られた仲間との共同生活である。デイサービスの人に比べたら生活の場は狭いかもしれないが、夜を過ごした個室から出て、三食をリビングルームで仲間と囲み、テレビやカラオケを楽しみ、ゲームやレクリエーションに興じ、ホームでの夏まつりや遠足にも参加する。まるで一つの大家族のような暮らしの中で、家族とも言える仲間とのつながりは強い。そこには支え合う穏やかな日々がある。デイサービスもグループホームも、そこに集う人達に、やさしさと温もりを感じてもらえることがいかに大切であるかを、老いた身に与えられたこの仕事を通して、今、改めて私は学び続けている。夫が入居している老人ホームでも、毎日数えきれないほどの温もりのある場面を目にし、安堵とよろこびと、スタッフ達への感謝の思いを抱いて、幸せな面会時間を私は過ごしている。

〝忘れても、心は生きている認知症〟という呼びかけの言葉を、先日、医療機関のポスターで目にした。もう幼子に戻った夫を持つ私への呼びかけであり、問いかけでもあった。グループホームにも、デイサービスに通う人の中にも、夫と同様に認知症の人達がいる。超高齢社会にともなうこの大きな課題に対し、〝健康寿命〟への関心が今、高まりつつある。

夫はもう、ほとんど言葉を持たないし、文字も書けないが、七十二歳までの歳月の思い出は消えても、介護スタッフ達のやさしさに包まれ、笑顔に癒やされて穏やかな日々を重

ねている。「ありがとう」は、夫が時に口にする言葉だ。面会中、私にも言うことがある。たとえ過去は消え去っても、自分に寄せられるやさしさ、温かさは、しっかりとその心に届いている。まさにポスターの呼びかけどおりだと思いながら、夫の背を私はそっと擦る。

最近、週刊誌などで、〝よい老人ホームの見分けかた〟という記事を目にすることが増えた。環境、交通アクセス、建物の規模、費用など、多方面からチェックした記事だが、夫を通して、そして高齢看護師としての日々を通して、そのランク表からは見えないものが私には気にかかる。優良施設として選出する際、そこに日溜まりのような温もりはあっただろうかとの思いは杞憂であってほしい。夫のいる施設も、私の職場も、決して新しいとは言えない。だが、そこにある温もりの介護に視点をあてれば、迷いなく優良老人ホームの上位ランクに入るだろうとさえ私は思う。

この同じ週刊誌に、〝七十五歳まで働ける社会を目指そう〟という記事があった。従来六十五歳以上を高齢者としていた定義には医学的根拠がないとして、今後は七十五歳以上とする提案が示されているようだ。これには年金問題がからんでいるとされるが、たまたま七十五歳で職を得た私にとっては興味深い。

面接のあの日、久しぶりに書くこととなった履歴に、私は十年前の自分を思った。気持ちだけは当時と同じに若いつもりでいる私の、小さなそのこだわりは誰も知らない。

この八月なかば、終戦記念日を目前にしたテレビ番組で目にしたタイトルが、今も私の胸にある。〝ただ温もりがほしかった〟と題されたその番組は、かつての戦争孤児達の悲惨な日々を再現したものであったが、とりわけ私の心にひびいたのは、八十五歳のO氏の体験であった。このO氏のことは、数日後の新聞でも大きく取り上げられていた。孤児として過酷な二年間の路上生活を経て、児童保

護施設に送られた彼は、そこで生涯の恩師となる寮長先生に出会う。シラミだらけの彼を銭湯に連れて行き、皮膚病の広がる背中を無言で洗い流してくれたそのE先生。初めて触れた温もりは、荒(すさ)んでいた彼を立ち直らせる大きな力となった。衣食住すべてに飢えていた時代であったが、その温もりこそが親のいない彼にとって、心ゆさぶるものだったのだ。O氏に愛情を注いだE先生の口癖は、〝誰かに必要とされる人になってほしい〟であったという。長年、O氏は戦争孤児だった過去を隠し続けてきた。だが、戦争の記憶の風化を感じて、遠い日の温もりを胸に語り始めた。

十八歳の春、看護学校の入試の面接の時、看護師を志望する理由は何かと問われた。その問いに対して、多くの受験生は、大きな夢や理想をまじえて思いを述べたという。「それが、ほとんどの人達の答えだったの。だけど、あなたの答えはシンプルだった。〝自分はとても丈夫なからだに育ててもらったから、それを病気の人達のお世話に役立てたい〟だった。その答えに、あなたの真っ直ぐな思いがこもっていて私達の心に届いたの」

入学してしばらく経った頃、総婦長さんが笑顔で教えてくださったことを時に思い出す。もう私には、体力を誇ることはできないが、看護学校で学んだナイチンゲール誓詞の、温かい看護の心は、今日まで抱き続けてきた。

先日、電車で席を譲られた。我が人生初めての経験であった。まだまだ元気で、優先座席に座ることにも抵抗がある私だが、孫のようなあの若者には、支えを必要とする老人に見えたのかと、ためらいを捨て好意に甘えた。

つい先日、私は七十六歳になった。バスに揺られて職場に通う日々は楽しいが、たった一つ、職を得た私が失ったものがある。それは、この一年、続けてきた夫との面会が、仕事の日は一日一回になってしまったことだ。最近ではすっかり幼児に戻って、自分の手の指を吸う場面が出てきた夫だから、面会時間

は次第に長くなってきていた。そんな中での私の変化に、夫は気づいているのだろうか。訪ねていくと「よかった」とつぶやく彼。〝この人より長生きしなければ〟との在宅介護の頃の思いは、〝私のために長生きしてね〟との願いに変わってきた。入居以来、施設の温もりある日々によって得られた心境である。

「お母さん、無理したら駄目だよ。もうゆっくりしたらいいのに」と遠く住む息子は言うが、私を必要としてくれるお年寄り達や夫に、心のナイチンゲールとして寄り添いたい。

「あしたも来るよ、待っててね」指切げんまんをし、夫と別れて帰る夜道に人影はない。明日もまた、笑顔あふれる職場が待っている。足取り軽く仰ぐ夜空に、夏の月の輝きがある。

《最優秀賞》

詩　部　門

キグルミになりたい

山内　莉瑚

キグルミになりたい
人にわる口を言われても
何も言いかえさず
いつも笑顔

キグルミになりたい
人にたたかれても、けられても
やりかえさず強い体で
いつも笑顔

でもキグルミがひとりになった時
出てくるのは
つかれた心といたかった体
作っていた笑顔

キグルミになりたい？

本当になりたいのは
そんなひとりになったキグルミの
心と体に気がついて
「いたかったね」
「がんばったね」と
声をかけてあげられる人

《最優秀賞》

創作童話部門

ふみちゃんの木

山﨑　眞由

カラーン。

ブルーベリーのじいじが、スプーンを落っことした。ベッドの中で、口をもごもご動かしながらふみを見る。

「はあ……、しもたぁ」

しわがれた声が病室にひびき、すぐさましぼむように消えた。

ふみは、五年生用のドリルを閉じて丸いすから降りた。スプーンを拾うと、おずおずとベッド台に置き、そっとじいじから離れた。

（ママ、早く戻ってこないかな）

ママは売店へ買い出しに行ったまま、なかなか帰ってこない。ついて行きたかったけれど、「ふみは余計な物を欲しがるから、だめ」と、低い声で言い放たれてしまった。

フリルのスカートのしわをのばして、丸いすに座りなおした。もう一度、ひざの上にドリルを開き、鉛筆を持ち直す。うつむきながら、頬にかぶさるポニーテールごしに、じいじを見た。じいじは、プリンをゆっくりゆっくり口の中に送りこんでいる。しみだらけの手が、小刻みにふるえていた。

（いつものじいじよりガリガリで、怖いよ）

ブルーベリーのじいじは、ママのおじいちゃんだ。ふみからするとひいおじいちゃんになるけれど、「ひいおじいちゃん」と呼んだことはない。うちから車で一時間ほどの田舎に、じいじの家がある。

庭には、ブルーベリーの木が二本あった。木は、パパの背丈より高い。それは、ふみのために植えたものだと聞いた。じいじの孫は

ママしかいない。可愛がっていたママに赤ちゃんが生まれたとき、じいじは大喜びで、ブルーベリーの苗を買いに行った。「記念や」と言いながら庭に植えた木には、ふみが物心がついた頃には、たくさんの実がなっていた。「『実のある人生に』という花言葉にちなんで、じいじはブルーベリーを選んだんよ」

袋いっぱいになった実を覗き込んでいる横で、ママがそう教えてくれた。

それを聞いた時、ふみは気恥ずかしさと嬉しさで頬を赤らめた。引っ込み思案で、目立たない自分が、主役として認めてもらえたようで、誇らしくなった。でも、じいじ本人からは、そんな言葉を聞いたことはない。

「盆の時期にはあんたら来るし、まだ、ようさん実が残ってるから持って帰れるやろ」

じいじは、なんだか照れくさそうに、すきっ歯を見せて笑うだけだった。

病室の中は、しんと静まりかえっている。

（気まずいなぁ。私、何も気のきいたこと言えへんし、ママがいないと間が持てへん）

じいじとふたりっきりになったのは、初めてだった。もう一度、ちらりとじいじを見た。すると、じいじも、プリンを食べる手をとめてこっちを見た。申し訳なさそうに眉を八の字に下げて、しぼり出すように声を出した。

「おかあちゃん、遅いのう。ふみちゃんも退屈やのう」

ふみは、あわてて首を横に振った。

「宿題してるし、大丈夫」

ママがやっと戻ってきたころには、じいじはすでにプリンを食べ終えていた。

「ごめん。おばあちゃんから電話があって、ちょっとしゃべってたんよ」

おばあちゃんとは、ママのお母さんのことだ。ブルーベリーのじいじの家から車で五分の所に住んでいるので、一人暮らしのじいじの身の回りの世話は、ほとんどおばあちゃんがしている。今日は用事で来られないのが、ふみには残念なことだった。

ママはてきぱきと、新しいタオルを棚にしまったり、冷蔵庫に飲み物を入れたりした後、空っぽのプリンの容器をごみ箱に捨てた。ふみも気がついていたけれど、すぐに捨てると早く食べ終わるのを待っていたようで、ためらっていた。

（私、ぜんぜん役に立てへんなぁ）

三人でお茶を飲んだ後、ふみとママは病室を後にした。

中央玄関を出ると、ふみは花壇の紫陽花（あじさい）に目をやった。気の利かない自分にじれったさを感じながら、小さなため息をついた。

「ねえ、じいじ、いつ退院できるの？」

「さあ、どうかな。入院してもうひと月たつものねぇ。早く元気になってほしいけど」

ママはバッグから車のキーを取り出し、空を見上げる。

「はー、蒸し暑い。夕方にはひと雨きそう」

ふみはそうやね、とうなずいて、ママの真似をして空を見上げた。

その日の夜、ふみは不思議な夢を見た。

ふみは花畑の真ん中に立っていた。涼やかな風が、紫陽花、菖蒲（しょうぶ）、バラたちをざわざわと揺らしていた。色とりどりの花と、甘い香りにうっとりした。

歩いていると、二本の木が目にとびこんできた。木の横に誰かが立っている。ふみは、目をこらしてその人を見た。

「あっ、ブルーベリーのじいじや」

駆け出そうとした瞬間だった。足元の紫陽花たちが突然、しゅんと枯れた。ぎょっとしたのもつかの間、菖蒲やバラも、約束し合ったかのように、次々にしおれ始めた。ポツリポツリと雨が降りはじめると、あわててじいじの側に寄った。じいじは、木の幹に手をあてて、しょんぼりしている。

「これも、じき枯れるかもわからん」

「これ、なんの木？」

「ブルーベリーやんかぁ」

実がついているブルーベリーの木しか見た

ことがなかったから、気がつかなかった。ふみは、木とじいじを交互に見た。

（ブルーベリー……。枯らしたらあかんやん。ふみとじいじの大事な木やで？）

そう言いたいのに、なぜか言葉にならない。いつも肝心なことが言えないし、出来ない。あわててじいじの手をにぎった。そうしないと、どこかに行ってしまいそうだった。しわしわの手は、温かいのか冷たいのか分からなかった。

そこで目が覚めた。時計を見ると夜中の三時だった。外から雨音が聞こえてくる。夢の中のじいじはどうなったんだろう。現実のじいじは病院で一人ぼっちで寂しくないのかな。不安と心配の中で、ふみは無理やり目をつむった。

翌日、学校から帰ると、ママが作りかけの夕ご飯にラップをかけているところだった。

「さっき、連絡があってね、じいじ、昨日の夜から調子悪いねんて。ママ心配やから、今から病院行くけど、ふみも行く？」

ふみは昨日の夢を思い出した。枯れた花々と嫌な予感が、心の中で重なってしまう。ふみはママのエプロンを引っ張って、お願いをした。

「病院に行く前に、じいじの家に寄ってほしいねん」

ママは目をぱちくりさせて、ふみを見下ろした。

じいじの家に着くと、ブルーベリーの木まで走った。木と土は、カラカラに乾いていた。ふみは、庭の水道からバケツに水を入れた。それから、不安をかき消すように繰り返し木に水をやった。ママは「早くしなさい」なんて言わずに、静かに見守ってくれていた。

病院に着いたときは、外はもう薄暗くなっていた。先に来ていたおばあちゃんが「ふみちゃんも来てくれたんやね」と言ってにっこり笑ってくれた。いつもと変わらないおばあちゃんを見て、少し気分がやわらいだ。ふみ

はママといっしょにベッド脇に近づいた。じいじは、つらそうに眉間(みけん)にしわを寄せていた。
「なんや、来てくれたんか。悪いのう」
ママは、やせ細った腕や肩を静かにさする。
「どない?」
「ちょっとな、背中が痛むんや」
ふみは、自分も励ましてあげたいのに、何を言っていいのか分からない。ぼんやりしていると、じいじが手をのばしてきた。
「ふみちゃんも、ごめんやでぇ。じいじのことは、ええんやで」
ふみは両手でスカートをにぎって、数秒間だまった。その後、小さく口を開いた。
「さっきな、ブルーベリーに水あげてきてん」
じいじは、ゆっくりとまばたきをした。
「ほうかぁ。あれはな、ふみちゃんの木や」
「うん。ふみとじいじの大事な木やで。枯らしたらあかんねんで」
ふみはそう言って、しわしわの手を握った。じいじは、口をぽっかりとあけて、声を出さずに笑った。じいじの手のぬくもりが、不安で固まった心をもみほぐす。ふみは心の片隅で、昨日、じいじが落としたスプーンを洗わずに渡してしまった事を後悔した。じいじは、痛みを追いやるように長いため息をついた。
「あんたら、遠いやろうに。もう遅いからな。早ようお家へおかえりぃ」
ふみは少しほほ笑んで、曖昧(あいまい)にうなずいた。
それから二カ月が経った。お盆休みになると、家族でブルーベリーのじいじの家に行った。居間には、おばあちゃんだけがいた。よう来たね、ごくろうさんと言って、冷たい麦茶を入れてくれる。麦茶を飲み終えると、ふみは庭に出て、ブルーベリーをたくさん摘み取った。袋いっぱいになった実を持って、家の中にかけ戻った。居間には戻らずに、和室に入ると、そこには、パパとママとおばあちゃんが座布団に座っていた。それからすぐ側で、じいじがパジャマ姿でベッドに腰かけて

いた。ふみは咳(せき)払いをひとつして、じいじに青い実を見せた。
「今年はふみ、ひとりでとってん」
「ほうか。大きいのう。ふみちゃんが、たくさん水やってくれたからやのう」
「これでじいじに、ジュース作ったげる」
じいじはうなずいて、ふみの頭をなでた。
「ふみちゃんも、大きゅうなった」
やわらかい風が、窓際の風鈴をチリリンとならした。

優秀賞

《優秀賞・一般の部》

小説部門

旭町一班・姉ちゃんとめぐちゃん

尾崎　順子

〈登校班〉

「何ぐずぐずしてるん！　しょうまあ、走っといで！」

姉ちゃんが公園の藤棚の下で叫んでいる。のんびりパンを食べていたら、いつの間にか登校班の出発時刻になっていた。僕は両手に袋をさげて、大急ぎで駆けていく。

姉ちゃんは六年生。旭町一班の登校班の班長だ。僕は五年生。

たった一年違うだけというのに、姉ちゃんは僕にいつだって上から目線でものを言う。はよ宿題しい、はよ風呂入り、はよ食べ。

家の中にはまるで母さんが二人いるみたいだ。そりゃあ僕は忘れ物は多いし、時間にルーズだし、サッカー以外で姉ちゃんに勝てるものはないから仕方ないけど……。でも、もう少しやさしくしてくれてもええんとちゃうんかなあ。

けれど、姉ちゃんは、登校班の子にはやさしい。

旭町一班の登校班は、全部で八人。六年生と四年生と三年生が二人ずつ、五年生は僕一人、それから一年生が一人。

姉ちゃんは今朝も、一年生のみっちゃんの長い髪を、ヘアゴムでくくり直していた。

みっちゃんは、お父さんとお兄ちゃん四人の六人家族だ。お母さんはいない。四番目のお兄ちゃんの和樹は四年生。和樹はお兄ちゃんたちのお古のランドセルを使っているから、肩かけのところがちぎれてボロボロになっている。そこをひもでくくり付けて堂々

と背負っているからえらい。
四月、学校からの帰り道、和樹のランドセルをからかっている下級生がいた。
「ぼろっちいランドセル！」
「汚ったなあ」
僕が言い返してやろうと思って近づくと、和樹はその子らに堂々と説教していた。
「何言うとるん。これは俺で四代目のランドセルやで。おまえらのはまだ一代目やろ。格が違うんじゃ！」
「格が違うんじゃ！」
と一喝されて、その子らはこそこそ逃げていった。その時から僕は、和樹は大物やと思ってる。
妹のみっちゃんは、三月に卒業した由梨奈ちゃんの、ピンクのランドセルをもらっていた。由梨奈ちゃんは丁寧に使っていたから、みっちゃんのランドセルはまだとてもきれいだ。でも、一年生なので上手に髪をくくることができない。みっちゃんの他は男ばっかりの家族やから、誰も髪を直せないらしい。だから、みんなを待っている間、姉ちゃんが毎日やり直してやっている。
夢香と花音（かおん）は三年生。クラスはちがうけれど、二人はとても仲がいい。今朝も、運動会のダンスの話で盛り上がっていた。
「花音ちゃん、あと一週間で運動会やねえ。三年生のダンス、かっこいいと思わない？」
「うん、うん、思う、思う。飛び上がって、パンパンと手をたたいて、ぱっとしゃがむとこ、ジャニーズみたいやろ。わたし、あそこがいちばん好きやわあ」
「わたしも！」
「そうや、今日からポンポンを付けて踊るって、先生、言ってはったよ」
「うわあ、すてき！」
そう言うと、二人は、みんなの前でも平気で踊り始めた。月曜日の朝から、テンション高いなあ。僕なんかまだ、頭がぼうっとしてるのに。

四年生の木の葉は、和樹と同じクラスだ。姉ちゃんと話をしている。

「ねえねえ、莉音ちゃん。和樹は給食、すごい食べるんやで。このごろ運動会の練習終わるんが遅くて、食べる時間があんまりないやろ。この前なんか、牛乳が四本も残ってたんや。それを和樹がみんな一気飲みしたから、おなかこわせへんかって、わたし心配やったわ。和樹、朝ごはん食べてないんと違う?」

「大丈夫、大丈夫。給食残したら、給食室の先生に悪いやろ。和樹は役立ってるやんか」

横で和樹が、そうやそうやとうなずきながら聞いている。そう言えば、運動会の前っていっつも給食が遅くなるからいやなんや。四時間目が終わってもずうっと練習していて、ひどい時は食べる時間が十五分もない。いちばん楽しみにしている時間やのに、これはひどい。

でも、こんな話、しててええん。そろそろ出発しないと僕らの班は遅刻してしまうで。

「姉ちゃん、僕に、はよ来いってどなったのに、何で行かへんの?」

「そやかて、めぐちゃんがまだやろう」

「めぐちゃん?」

ああ、そうか。めぐちゃんがまだ来てないんや。

めぐちゃんは、姉ちゃんと同じ六年生。登校班の副班長だ。言葉ははっきりしないけど、目がくりっとして、いつもニコニコ笑っている。きげんのいい時なんか、ふんふん鼻歌を歌いながら学校へ行く。

特別支援学級の「さくらんぼ」に入っているけど、国語と算数の授業以外は姉ちゃんと同じクラスで勉強している。家が近所なのでめぐちゃんと姉ちゃんは、一年生の時からずうっと同じクラスだ。帰る時も、もちろんいっしょ。

去年三月の地区児童会でめぐちゃんが副班長になることを決めた時、旭町の他の班長たちは反対した。

「副班長って、班長と同じくらい責任があるんだよ。めぐちゃん、大丈夫？」
そう言われてめぐちゃんがおどおどしていると、姉ちゃんはきっぱり言い切った。
「めぐちゃんがいるから、わたしら一班は喧嘩がないんや。一班は全員、めぐちゃんに副班長になってほしいと思ってるよ」
夢香も花音も和樹も木の葉も、そしてもちろん僕も、そうやそうやと頷いた。
めぐちゃんがやらないと、五年生の僕に副班長が回ってくる。姉ちゃんと組むなんて、絶対いやだ。めぐちゃんは、僕みたいに遅刻することなんて、一回もない。
ところがそのめぐちゃんが、運動会の練習が始まってしばらくたったころから、よく遅れてくるようになった。
遅れることの大きらいな姉ちゃんは、イライラしている。木の葉のおしゃべりにうんうん頷いているけど、めぐちゃんの家の方をチラッチラッと見ながら右の靴先で地面をコンコン蹴っているのは、姉ちゃんがイライラしている証拠だ。
もう出発せんとあかんなと僕が思った時、おばちゃんに手を引っぱられながら、ひきずられるようにしてめぐちゃんがやってきた。
「ごめんね、ごめんね」
おばちゃんは顔を真っ赤にしながらめぐちゃんを引っぱって、みんなのところへやってきた。
「待たせてごめんね」
おばちゃんはもう一回みんなに謝ってから、姉ちゃんに話しかけた。
「莉音ちゃん、恵はこのごろ毎朝学校へ行きたがらないんやけど、何でやろう」
「ううん、何でかなあ。もしかしたら、組体操かなあ。組体操がいやなんかなあ」
姉ちゃんとおばさんは困ったような顔をして、しばらく話をしていた。

〈組体操の練習〉

運動会の練習は、一年生から順番に学年順にやっている。僕ら五年生の次が六年生だ。運動会まで残り一週間になったので、今日からは五、六年いっしょに練習することになった。五年生がソーラン節や騎馬戦の練習をしている間、六年生は運動会に向けていろいろな準備をしている。玉入れや綱引きの道具を出したり、ライン引きやテントの点検、放送の用意をしたりと、何かと仕事があるようだ。

五年生の練習中、姉ちゃんは、水の入ったやかんを持って走り回っていた。いつ見てもさぼってないのが、姉ちゃんらしい。

五年生が終わって六年生が組体操の練習をする時、僕らは今日から、来年のために、少しだけ見学できることになった。今まではすごいなあと思って見ているだけだったけど、来年はこんなにむずかしいことをやるのかと思うと、気持ちが引き締まる。

めぐちゃんのそばには、さくらんぼの先生がついていた。めぐちゃんの近くには必ず姉ちゃんもいるから、めぐちゃんの場所が分かれば姉ちゃんもすぐに見つかる。

体のやわらかいめぐちゃんは、V字バランスもブリッジもとても上手だった。二人技のサボテンや肩車は、さくらんぼの先生と組んでやっている。これもきれいだ。こんなにきれいにできているのに、組体操が何でいやなんやろう。朝の姉ちゃんの言葉を思い出しながら、僕はめぐちゃんをずっと見ていた。

三人技、四人技、五人技と人数が増えていくうちに、めぐちゃんは、さくらんぼの先生に手伝ってもらうことが多くなってきた。けど、ちゃんとできている。

六人でやるピラミッドの時だった。

めぐちゃんは姉ちゃんといっしょにいちばん下の段になって、四つん這いになった。他のグループは三人で土台を作るけど、めぐちゃんのグループは、先生も入れて四人で土台を作っている。その上に二人、またその上

に一人と乗っていった。でも、はしっこにいるめぐちゃんの上にはだれも乗らない。その代わり、さくらんぼの先生の上に二段目の子が乗っている。めぐちゃんは何だかおまけのようだ。

「先生がめぐちゃんの代わりに土台になっているのか。めぐちゃん、腕の力が弱いからなあ」

そう思って見ていると、めぐちゃんは突然立ち上がって、自分の背中をパンパンたたき始めた。

「乗って、乗って」

と言ってるみたいだ。先生が一生懸命何か話をしている。めぐちゃんは泣き出しそうな顔をして、首を横にふっていた。演技はどんどん進んでいく。

「みんなと同じようにやりたいんかなあ」

おばちゃんに引っぱられてきた朝のめぐちゃんの姿が、ちらりと頭にうかんだ。

「それでもめぐちゃん、めぐちゃんの上に乗る人が落ちたら、危ないやんかあ」

僕がそう思った時だ。

姉ちゃんが列から離れて、めぐちゃんと先生のそばに近づいた。今度は三人で何か話をしている。

「何の話をしてるんやろう」

おばちゃんと姉ちゃんの朝の話を思い出したのでそのまま運動場にいたかったけれど、僕ら五年生は、そこでもう教室へもどる時間になってしまった。仕方なく僕は、みんなといっしょに昇降口へ向かっていった。

〈三段ピラミッド〉

その日の昼休み、僕が運動場へ出ると姉ちゃんがいた。めぐちゃんのいる組体操の六人グループとさくらんぼの先生もいっしょだ。隅の方で三段ピラミッドの練習の続きをしていた。

四時間目に先生がいたところに、めぐちゃんが入っている。左からめぐちゃん、姉ちゃ

ん、そしてサッカー部の先輩の克彦さんの順だ。でも、上に人が乗ると、めぐちゃんはどうしてもぐにゃっとくずれてしまう。危ないので、先生は、めぐちゃんの後ろにずっといる。

作戦をかえたらしく、途中からめぐちゃんはいちばん上の三段目に行くことになった。けど、めぐちゃんは背が高くてけっこう重いし、よじのぼる力が弱い。だから、何回やってもピラミッドは完成しない。

それでもみんなは、文句も言わずに練習に付き合っていた。

その時、どこで見ていたのか、体育の桂先生が姉ちゃんたちに近づいて行った。そうしてめぐちゃんの肩と腰のあたりを手のひらで押さえ、何か熱心に説明を始めた。みんな一生懸命に聞いている。話が終わるとめぐちゃんは、初めのようにいちばん下へ行くことになったようだ。さっきは左のはしっこにいたけど、今度は真ん中に入っている。左側は姉ちゃん、右側が克彦さんだ。二人はめぐちゃんをぎゅっと挟みながら、土台になっていた。真ん前で、さくらんぼの先生が、めぐちゃんの肩をしっかりつかんでいる。

そのまま二段目の子が上に乗った。よく見ていると、二段目の子はめぐちゃんの肩と首の付け根あたりに手のひらをあて、ちょうど腰の上に膝を乗せている。そうやると、なんと、めぐちゃんはつぶれない。次に、三段目の子が上った。めぐちゃんは、やっぱりつぶれない。上の子が手と足を置く場所を変えただけで、めぐちゃんはできるようになったんや！　桂先生は、魔法使いみたいやんか。

「右、左、前！」

克彦さんのかけ声で六人の頭が、右へ、左へ、前へと動く。

「ヤー！」

かけ声とともにピラミッドがつぶれた。めぐちゃんも両腕を前に出してつぶれている。

成功だ！

やった、やったぞ！
僕は思わずガッツポーズをした。
次の日、めぐちゃんはいつものめぐちゃんにもどっていた。僕より先に登校班の集合場所へやってきて、夢香と花音がにぎやかにダンスを踊るのを、楽しそうに眺めていた。
「めぐちゃん、ピラミッド、できるようになってよかったなあ」
僕が声をかけるとめぐちゃんは、
「六年生やからな」
と、すまして答えた。それから、にっと笑って僕にピースサインを送ってきた。

〈運動会〉

十月六日。
とうとう今日は、運動会だ。
九月までは毎日三十度を超す暑さだったのに十月に入ったとたん急に涼しくなって、この日の朝は、体操服一枚では寒いくらいの天気になった。青空はところどころ見えるけれど、雲が多くて風も少し吹いていた。天気予報によると、日中は曇りがちだが雨は降らないらしい。
六年生の姉ちゃんとめぐちゃんは、準備のためにいつもより一時間も早く学校へ行ってしまった。だから、旭町一班の登校班の班長は、今日だけ僕だ。
「翔真、早めに行っときよ」
昨日の夜から何回も姉ちゃんに言われていたけど、集合場所へ着いたのは、いつも通り結局僕がいちばん遅かった。
みんなは、あいかわらずにぎやかにおしゃべりしている。木の葉の大きな話し声が聞こえる。
「和樹、うちのお母さん、朝からから揚げ、たくさん揚げてたで。今日はみっちゃんと和樹君にぎょうさん食べてもらう言うて、はりきってたわあ」
「ほんまあ。俺、学年対抗リレー、がんばらんとあかんなあ」

和樹とみっちゃんのお父さんは日曜日も仕事があるから、運動会の二人の弁当は、木の葉の家のおばさんが作ることになっている。おばさんは、料理が上手だ。だから、四月から始まった子ども食堂の手伝いにも行っている。

夢香と花音は、髪をみつあみに編んでもらって、おそろいのリボンまでつけていた。バレエの発表会じゃあるまいし。そんなんで、棒引きができるんかなあ。でも二人は、ダンスのことだけで頭がいっぱいらしい。

わいわいがやがや言いながら僕らが学校へ着くと、六年生は忙しそうに運動会の準備をしていた。

午前中の演技が無事終わり、午後からのプログラムも順調に進んだ。時々雨がポツポツッと降ってくるけれど、何とかこのまま最後まで持ちそうだ。全校対抗リレーが終わり、いよいよ最後の組体操。

僕は、姉ちゃんとめぐちゃんがよく見えるように児童席をそうっと離れて、指揮台の横の来賓用テントのはしっこに座りにいった。背筋をピーンと伸ばして三角座りをしていると、組体操の手伝いをする子と間違われて、誰にも文句を言われない。

「二人とも、うまくやるかなあ」

僕は緊張しながら、六年生が入場してくるのを待っていた。

やがて、組体操は始まった。

一人技、二人技…、五人技。一つの技が終わるたびに客席から大きな拍手が起こる。

いよいよピラミッド！　めぐちゃんは、姉ちゃんと克彦さんにぐっとはさまれながら、二段目の子も三段目の子も背中に乗せていた。さくらんぼの先生は、後ろでかがんで見ているだけだ。あれからめぐちゃんはもっともっと練習したらしく、先生の支えなしに完璧にピラミッドができるようになっていた。姉ちゃんたち、がんばったんや！

最後のタワーが完成した時は、運動場がわ

あんというくらいの拍手だった。
どの演技もカンペキにやったやん！
僕はものすごくうれしくて、手が真っ赤になっても拍手をしていた。

〈姉ちゃんの水たまり〉

さあ、いよいよ退場行進。小学校最後の運動会になる六年生は正面に集まり、背の高い方から四列に並んで行進していく。
一列目のいちばん前は姉ちゃん。姉ちゃんの後ろはめぐちゃん。めぐちゃんの後ろは克彦さん。退場の曲が流れ出すと、六年生はおもいっきり背筋を伸ばした。
ところが、いちばん前にいる姉ちゃんの様子が何だかおかしい。肩のあたりがへんにこわばり、両足をもじもじさせている。いつだって一度も気をゆるめたことのない姉ちゃんが、こんなに体を動かすなんてどこか変だ。気になって、姉ちゃんだけをじっと見ていると、体操ズボンを伝って水がひとすじ流れ出し、足元に小さな水たまりを作っていった。
僕は、あっと思った。
「もらしたんや」
小さな水たまりは、たぶん後ろにいるめぐちゃんと僕しか気がついていない。正面から見る姉ちゃんは、今にも泣き出しそうな顔をしている。
トイレに行く時間がなかったんや。僕は、すぐに気がついた。
姉ちゃんは準備係だったので、登校班の僕らと弁当を食べた後、すぐに白線引きの仕事をしにいった。雨が降らないうちにプログラムを終わらせるため、午後の開始は予定より十五分も早かった。
だから、姉ちゃんには、昼休みがなかったんや。トイレに行く時間がないまま、組体操になってしまったんや。その上、今日は特別寒い。姉ちゃんのあほう、トイレくらい何で行かんかったんや。
このままめぐちゃんが水たまりをよけて歩

くと、後ろの子もみんなめぐちゃんの後に続いて水たまりをよけて歩く。そうなると、六年生だけでなく、運動会に来ている人みんなに姉ちゃんのおしっこがばれてしまう。

僕は祈るような気持ちでめぐちゃんを見ていた。

「まっすぐ歩いて、めぐちゃん」

でも、歩かなかったらどうしよう。おしっこの上を裸足で歩くなんて、だれだっていややもんなあ。

これから起こることを考えて、僕の心臓はバクバクしていた。

とうとう行進が始まった。先頭の四人が歩き始める。めぐちゃんも、姉ちゃんの後を歩き出した。ドキドキしながら見ている僕の前で、めぐちゃんは前を向いてまっすぐに歩いた。水たまりを踏んで歩いたんや！

克彦さんがその後を歩くと、次の子も、その次の子も、続いて歩いて行った。姉ちゃんも、まっすぐ前を向いて、最後まで歩きとおした。

よかった！

僕はほっとして、体中の力が抜けてしまった。

めぐちゃんってぼんやりしてるから、もしかしたら、おしっこってことに気が付かなかっただけかもなあ。

そう思いながら、僕は自分の席へもどっていった。

でも、その日の夕方、姉ちゃんと母さんの話を、僕は聞いてしまった。

「お母さん、わたしな、組体操の間ずっとおしっこ我慢してたんやけど、ほっとしたとたん、もらしてしまったんや。もう恥ずかしくて恥ずかしくてパニックになりそうやった。けど、歩かなあかんと思って退場門まで行ったら、めぐちゃんがすぐにわたしの手を引っぱって、着がえを借りに保健室へ連れて行ってくれたんや。莉音ちゃん、平気平気って言いながら、さっさと連れて行ってくれたんや

で。わたし、頭の中が真っ白になってたからほんまにうれしかったわあ」
「よかったなあ。お父さんと二人で見てたけど、莉音がおしっこをもらしてたなんて、先生に後で知らせてもらうまで、全然気が付かなかったわあ。めぐちゃん、よう歩いてくれたなあ」
「そうやねん……そやのにわたし、この頃めぐちゃんのことがちょっとしんどくなってたんや」
「なんで？」
「旭町一班の六年生は、わたしとめぐちゃんだけやろ。一年生の時からわたしはずうっとめぐちゃんの世話をせなあかんと思ってたんや。けど、登校班に遅れたり組体操の練習を嫌がったりするから、もういやや！と心の中で思ってたんや」
「そういう時もあるある。そやけど今日は、莉音を助けてくれたんやねえ。あんたとめぐちゃんは、親友やからな」

そうやったんか！　めぐちゃんは、おしっこの水たまりってちゃんと分かっていて歩いたんか。もしかしたらあのピラミッドだって、めぐちゃんのおかげできれいにできたのかもしれないなあ。
母さんの言う通りや。
めぐちゃんと姉ちゃんは、これまでも、これからも、ずうっと親友なんやろうなあ。
でも、姉ちゃんがしょんぼりしてたのは、その日一日だけだった。休み明けの今日は、いつもとかわらず、
「しょうまあ！　はよ、走っといで！」
と、藤棚の下で叫んでいる。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

小説部門

君の名前はまだ呼ばない

鈴木　優真

「松本一翔」

男性の低い声が教室にひびいた。

「今回もよくがんばった」

「……」

僕の手には丸がたくさん付いた紙がある。おそらく、クラスの中で一番丸が多いだろう。

だが、僕は喜ばなかった。なぜなら、僕にとってクラスの中で一番丸が多いのは当たり前だからだ。

「君、すごいね」

前の席の女子が僕に言葉をかけた。

「別に」

僕は、めんどくさそうに彼女に言葉を返した。

学校終了のチャイムが校庭に鳴り響いた。僕は、真っ白な校庭に足をふみ入れ、かじかむ手を僕の体温で温まったポケットにつっこんだ。気持ちは温まったが、顔につく少しの雪が冷たかった。

僕は、早歩きで誰もいない自分の家へと向かった。

十分後、僕は家の中にいた。すぐにストーブをつけ、学校で使った物を片づけた。

今ごろ習い事に行っている高校生、勉強をしている高校生、グータラしている高校生たちがほとんどだろうなぁと思いながら僕は台所に立った。米を炊飯器で炊いている間、賞味期限ぎりぎりのひき肉を取り出し、こまかくつぶして円形でうすい形にし、フライパンに油を入れ火にかけて温まってから入れた。焼き色がきれいについたら白い皿に野菜と

いっしょに盛り付けた。ご飯をお茶碗に盛り、今日は疲れていたので、インスタントのスープの粉を熱い湯の中に入れよくとかしてから完成にした。

僕は、一人で大きめのテーブルに食事を置き、

「いただきます」

と言い、はしでやわらかめのハンバーグを無口な僕の口へと運んでいった。久しぶりに作ったわりには速いスピードで僕の口へと、はしが働いた。

食事を作る時の三分の一ぐらいの速さで終わった。

僕は、疲れていたので風呂には入らず、学校に行く前に洗った洗たく物を干して、歯をみがき、少し固めのベッドに寝た。

僕の顔には、太陽が起こしてくれているかのように、光が差しこんでいた。だるい体を持ち上げてベッドから降りた。リビングへ行くと母さんがテレビを観ながら朝食をとっていた。

「おはよう」

今日最初の声を僕は世間の朝のあいさつで発した。

「おはよう」

母さんも返してくれた。

台所に立ち、自分の分の朝食を作った。正直、母さんより上手に作れているのではないかと思った。

昨日と同じように朝食を大きめのテーブルに置き母さんと同じようにテレビを観ながら朝食をとった。七時になりテレビ番組が変わった。次は人権について編集された番組だった。僕は人権がきらいだ。この世で一番きらいだ。でも、この番組を観た。やはりつまらない。

『人を支えるのは人間の役割である』

『一度友だちになれば永遠に友だち』

『人とかかわることで得るすばらしさ』

などとくだらないことを言っている。

僕は、人とかかわるのがきらいだ。だから、僕に友だちという友だちはいない。というかつくらない。僕は、一人でなんでもできる。勉強、スポーツ、家事、だから友だちなんて必要ない。学校では無口で声をかけられても、一言しか返さない。だからクラスのだれも僕に近づかない。僕にとっては少しうれしいことだ。

こんなことを考えている間に番組は終わった。僕は体を温めるものを体にまとい、

「いってきます」

と誰にも聞こえないような音量で言い、雪どけ水がたまる道に出た。僕は誰とも目をあわさないように自分のくつを見て歩いた。

「危ないっ！」

誰かが僕にむかって叫んだ。

気付けば体が宙に浮いている。僕の目の前は真っ黒だった。

「……」

僕はかたつむりのような速さで目を開く。見たことのない天井が目にうつる。

「良かった。ようやく目を覚ましたわね」

となりには、心配している声でしゃべる母さんがいた。

「あんた、車にはねられて道で倒れとったんよ」

「あ……そう……」

だるそうに母さんに言葉を返した。

「この子が助けてくれたんよ」

カーテンの後ろから僕の学校と同じ制服の女子が顔をのぞかせた。それは、この前のテストでめずらしく、声をかけてきたあの彼女だった。

「じゃあ、母さんは仕事があるから、いったん帰るわね」

と僕に一言言って病室のトビラをあけて出ていった。

「君ねぇ歩く時くらい前を見ようよ」

馴れ馴れしい感じで僕に話しかけてきた。

「うるせぇ」

「なにそれ！　心配してやってんだよ！　君みたいに友だちをつくらない、それになんでも自分で出来るからって人の事はかまわず自分のことだけ考えている君にだよ！」
　まだ会って三分しかたっていないのに、説教された。
「お前に心配されるほど大怪我じゃねぇよ」
「お前じゃなくて咲来とう名前があるんです」
　少し怒ったように彼女に返された。まぁそんな指示にむしをした。
　僕のお腹が小さく鳴った。小さいナイフを手に取り、骨折した右手をつかって、まだ少しうすい色がのこるリンゴの皮をむいていった。家事を毎日している僕にとって朝飯前の、はずだった…。なぜか右手が上手に使えない。僕はこのとき思った。もしかしたら車にはねられたことで完ペキがどこかへ行ってしまったということを…。
「貸して」
　その言葉と同時にナイフとリンゴが彼女の手にわたった。
「なにすんだよ」
「そんな手じゃリンゴの皮なんてむけないでしょ」
「よけいなおせわだ。さぁ返せ」
「ダメー！　素直にさぁ自分が今はできないことを認めたらどう？」
「だーれが認めるか」
　こんな言いあいをしている間にリンゴは白くなっていた。僕は思った。リンゴの皮むきは彼女の方がうまいんじゃないかと。
「食べないの？」
　彼女はおいしそうに食べながら僕に切ったリンゴをつまようじに一つさして僕の口元に運んできた。
「自分でくえるよ」
　僕は彼女の手からリンゴのついたつまようじを取り、そっと自分の口へと運んだ。
「女の子に食べさせてもらえるの、うれしく

ないの？」
　とても明るい表情で僕に問いかけた。
「あぁ。そもそも友だちでもないやつに食べさせてもらわないといけねぇんだよ」
「君は私と友だちじゃないんだ」
「当たり前だ。こっちは友だちを作る気なんてないんだよ」
　僕は小さい声ながらも少し強く彼女に言った。すると、真剣な顔で何かを考え始めた。友だちじゃないということを認めたのだろうか。
「友だちじゃないとしたら……」
　彼女はまた何かを考え始めた。十秒ぐらいすると、まるで何年も解けなかった事件の謎が解けたかのような顔をして僕の方へ振り向いた。
「親友だ！　いやぁもしかして彼女！　何考えてんの君は！」
　彼女はふざけたように笑いながら勝手に自分で妄想して少し照れている。僕は少しあきれた。
「何言ってんの。くだらないんだけど」
　と彼女に言ったが彼女は自分の世界に入っていて僕の声は彼女にはとどかなかった。
「じゃあ私、夕食の用意があるから今日は帰るね。また明日」
　彼女は急ぎ足で病室を出ていった。僕は彼女が最後に今日一番の笑顔で言った、『また明日』という言葉に心の中で、もうこなくていいと思った。
　次の日の夕方。彼女は、また笑顔で病室に入ってきた。僕は引き出しの整理やシーツをきれいにひき直していた。
『もーっ、何やってんの。病人はおとなしく寝てなさい」
　そう言い僕の手を無理やり止めた。
「はなせ」
「やーだね。君が素直にやめないなら、君ががんばって整理した引き出しをあらすよ？」
「……」

僕はそれがいやだったので、舌打ちをし彼女の言う通りにした。
一分ぐらいでシーツのひき直しが終わり、僕はその上に寝転んだ。
「どう？私のひいたシーツは？」
「何も変わんねぇよ」
「やったー」
僕は彼女に疑問をいだいた。なぜ、看護師が当たり前のようにひいたシーツと自分の仕事でもないのにひいたシーツが変わらないと言っているのに喜んだのか。
「私、看護師になるのが夢なの」
僕は看護師みたいに人と毎日心を結ばせる仕事なんて絶対したくなかった。
「だから、君に変わらないと言ってもらえたことがうれしかったんだよね」
彼女はそう言ったあと僕の頭の上にある、『松本一翔　様』と書いた名札を首をかしげながら目をむけた。
「これ、なんて読むの？」
いきなり僕に問いかけてきた。彼女は友だちが多そうなのに自分の後ろの席の僕の名前を覚えていないなんて僕はやはり存在感がうすいなぁと思った。でも全然いやなことでは、なかった。
「かける。まつもとかける」
僕は彼女に背中を見せながら言った。
「ふーん。君にぴったりだね」
「はぁ？」
僕は彼女に少し強く返した。
「なぜならね……」
その言葉と同時に僕は秒針がスーッとながれる時計に視線を動かした。すると、僕の目を見て話をしていた彼女は僕につられて視線を同じ時計に動かした。
「あっ！　もうこんな時間！　悪いけど夕方の用意があるから帰るね。また明日」
時計の針は五時をさしていた。今日も『また明日』と言われた。多分明日も笑顔で入ってきて今日途中で終わった話の続きから始ま

るだろう。でも来なくていいと心の中で思っていた。
次の日、予想通り笑顔で入ってきた。
「やっほー」
僕は窓の外を無表情で見ていた。彼女はそんな僕を見て言った。
「外に行きたいんでしょ」
「いや、別に」
正直少し外へ出たかった。ただ車いすに乗らないと、外へは出られない。きっと自分で車いすを押しても彼女は後ろから押すだろう。僕は人に手伝ってもらうのがきらいだ。だから行くのをやめた。
「素直になれってー　さもないと、私と君が親友だっていう嘘をクラスにながすよ」
彼女はクラスで人気ものだ。こんなこと知れたら、みんなから変な意味で注目されてしまう。人から注目を受けるのはいやなので、彼女の言う通りにした。
三日ぶりの外。なかなか気持ちが良かった。空はすいこまれそうなほど、きれいな空だった。僕は彼女に運ばれるまま木かげのあるベンチにすわった。木かげは冬には少し寒い。だから僕は日なたに出た。
「ねぇ。昨日の続きなんだけど」
僕の予想はまたもや当たった。
「なんで『一翔』って名前があっているって思ったかわかる？」
「わかるわけ、ねぇだろうが」
「君は勉強、スポーツ、家事などすべて優秀だ。見習いたいぐらい。でもねぇ名前にあるように君は一つかけている。それはね、人を支えるすばらしさ、人に支えられる幸せを知らないということだよ。君はそれを知らないと、人生の半分以上、損していることになるよ」
彼女にしては、まともな答えで驚いた。だが、彼女に言い返した。
「なんなんだよ。人を支えるすばらしさ、人に支えられる幸せ、こんなのなくても生きて

いけるんだよ。友だちを作ったところでケンカしたりして、いやな気持ちになるだけだろうがよ」
僕は彼女に声をあげた。でも彼女の表情は笑っていた。
「あーあ。初めて君に本気でキレられた」
彼女は僕にキレられたのに笑っている。やはり彼女は少し変わっていると、あらためて思った。
「ねぇ」
また僕に声をかけた。
「君はさぁ一人でなんでもできていたけど、事故にあったから今は一人でできることが減った。完ペキがどこかへいってしまった。それがいやなんでしょ」
彼女が言っていることは正しいかもしれない。僕はそう思いながら、だまって続きを聞いた。
「そう考えるから悪いのよ。君は完ペキがどこかへ行ってしまったんじゃなくて、休憩をしているだけだよ。これはきっと神様があたえた君へのプレゼントって考えたら少し気が楽になるんじゃない？」
彼女のこれは『休憩』という言葉が僕の心の中にある何かを動かした気がした。
「さぁっ、そろそろもどろっか」
彼女はそう言うと僕の体重を乗せた車いすをゆっくりと押した。なぜか同じ道を帰っているのに全然ちがって見えた。
「ねぇ君、さっきの言葉で何か変わった？」
少し変わったかもしれない。でも、そんなこと彼女に言うつもりはなかった。だから別の言葉を返した。
「あのさ、ずっと君君君って呼ぶのやめてもらえないかな」
「やーだよ。だって君は私の友だちじゃないんでしょ？　もし名前で呼んでほしければ友だちになることだね。それまでは君の名前はまだ呼ばないよ」
「……」

僕は『友だちになってやるよ』と言おうかまよったが結局言わなかった。
病室のベッドまで僕を運び、あとは自分でベッドのうえまで体を運んだ。五時をさす五分前になった。彼女はまた笑顔で、
「五時になるから帰るね。また明日」
僕は彼女が帰った後、病院の夕食を食べ、歯をみがいて、テレビを観て、寝るために毛布を体の上にのせた。この夜、僕の頭の中に、『完ペキにできなくなったんじゃなくて、これは休憩だよ』と彼女が言った言葉が残っていた。
それからというもの一週間毎日、同じ時間に同じ笑顔で僕に会いにきた。僕はあの日、『休憩』『友だちになるまで君の名前はまだ呼ばない』と言われてから少しずつ彼女の言うことをきくのもなれてきた。僕は彼女に心をとかしていった。
入院してから十日。今日は十二月十二日。彼女はこの十日間で一番の笑顔を見せて入ってきた。その表情は宝くじが当たった人みたいな笑顔だった。
「誕生日おめでとー！」
僕は驚いた。どうして彼女が僕の誕生日を知っているのだろうか。
「なんで、知ってんの？」
「君のお母さんから聞いたの」
「あぁ、そう」
「はいっ、これ」
彼女の手からわたされたのは桜の花びらのストラップだった。
「なにこれ」
「バースデープレゼント」
「あぁ。ありがとう」
「おぉっ。君もありがとうが言えるように、なったねぇ」
彼女はニヤニヤしている。僕が素直に『ありがとう』って言ったのがそんなうれしかったのかニヤニヤはとまらない。
「でも、なんで桜の花びら？」

「うーん。私の名前がさくらだからかな」
「もうじき死ぬわけじゃないのに？」
「そうだね」
彼女はまた笑った。
「あー死んだら桜の木でもなろっかなぁ」
いきなり先の話をしてきた。
「桜の木はみんなから注目をあびて、そしてきれいに咲く。なんせ注目をあびつづけている君にはぴったりかもね」
僕は素直に返した。確かに彼女の名前さくらは彼女にあっているのだろう。人から注目されて人気がある。僕と百八十度ちがう。僕は誰にも注目されない雑草だと僕は思った。
「わぁーいきなり素直かよー」
「お前が素直になれよ、とか言うからしてやったんだよ」
「ふーん」
「ねぇ…あのさ……」
「あぁごめん、五時だから帰るよ。じゃーまた明日」
「おぉ……」
僕は彼女に友だちになってくれと言うつもりだった。でも僕の考えた顔、声で言っても彼女には聞こえていなかった。僕は明日『君』を卒業することにした。
その日の夜、彼女とのことを考えた。僕はまちがっていたのかもしれない。僕は彼女に会うたびに人に支えてもらう幸せを覚えていった。きっと友だちというのは固くなった心をとかしていき、心が暗ければライトで照らしてくれる、そうやって助け合うのが友だち。僕は友だちの本当の意味を知ったよ。咲来に明日、反省した気持ちを伝える。そう考えた僕はねむりについた。
次の日の朝、僕は早起きをした。まだ空はうすぐらい。その空はゆっくりゆっくりと明るくなってきた。まるで僕が心を彼女にとかされていった感じがした。
今日からは少し新しい自分になれる。そう思うと気分があがり夕方までの十二時間がお

そく感じた。
四時三十分になった。彼女が来ない。僕は用事があっておそくなるんだろうと気にしなかった。
五時になった。彼女はまだ来ない。
「いつもなら、もう帰る時間なのになぁ」
六時、七時、八時、九時、と待ったが、結局彼女は来なかった。入院してから初めて来なかった。でも僕はそう考えず『また明日』の言葉を思い出し、明日は来ると信じていた。
次の日、彼女が笑顔を見せにくる時間がきた。でもとびらは開かない。彼女は今日も来なかった。
僕は次の日も、そのまた次の日も彼女を待ち続けた。
彼女が『また明日』と僕に約束してから五日がたった。彼女は今日も来ない。
六日目。僕に一通の連らくが届いた。学校の先生からだった。僕はこの日から何も考えられなくなった。人に対して、こんな感情はいだいたことがない。僕の頭の中は、からだった。ただただ涙だけが、こぼれでる。咲来を世界中さがしても絶対出会えない、そう…彼女は…この世の人ではなくなった。
「咲来は神社に行った後、帰り道の橋の上で足をすべらせ、そのまま川に落ちた」
「……」
僕は言葉を考えることはできなかった。
その日の夜、なぜかまた泣いていた。これは、なんの涙なのか、素直になれなかった、咲来にあやまれなかった、咲来にはもう出会えない。
いや……ちがう。
この涙は……、咲来に名前を呼んでもらえなかったことだ。たかが三文字、『一翔』って呼んでもらえれば……。彼女はいつでも呼ぶ気はあったのに……。僕がつまらない意地をはるから……。
「なんで名前を呼ぶ前に死ぬんだよ！」
病室で叫んだ。泣いて、泣いて、涙が止ま

らなかった。
十日後、僕は退院した。もう自分で歩ける。リンゴの皮だってむける。元気になった姿を彼女に見せてやりたかった。
僕は母さんとクリスマス一色で色どられた町なみをながめながら、久しぶりに自分一人で歩く学校の帰り道はいつもとちがって思えた。家に着いたらコートをハンガーにかけ、手ぶくろを机の上に置き、荷物を僕の部屋のもとにあった場所に返した。それが終われば いつもなら家事や勉強をする。でも今日は素直になって、つかれた体を休めた。でも頭までは休めなかった。そりゃそうだ。咲来のことで頭はいつも通りに動いていない。
「咲来…」
僕はそう言い、つかれた体をもち上げて、小さなカバンに荷物を入れ、
「ちょっと出てくる……」
と母さんに言いドアを開けた。
僕はゆっくりと歩いた。人の間をすりぬけ人通りの少ない川辺に足を運んだ。桜の木が寒そうにねむっている。そんなことを考えてたら橋の上に立っていた。そこから見る景色は春に見るのが一番だと思った。
「咲来、お前と見たかったよ。四月に」
僕は橋をわたり目的の場所までゆっくりと足を運んだ。そこは咲来が最後にふみ入れた神社だった。僕のとなりには彼女がいっしょに歩いているように感じた。神社の中を僕は彼女とともに歩いた。彼女が笑う。その笑顔につらさや、悲しさ、心の傷が頭の中でおしつぶされた。彼女が僕の手を優しくにぎり、何も言わず離して何も言わず走っていった。僕は何も考えず体が先に彼女を追いかけた。追いかけたさきには、いろいろな人がそれぞれ願い事を書きいれた絵馬がならべられていた。僕は一つ一つ他人の願い事に目をくばった。僕は人に興味をもたない。もちろん願い事にも。でも彼女に出会ってから、僕は変わった。多分百八十度。それが僕に合ってい

るかはわからない。でも確かなことは、この方が人間らしく生きられるってことだ。
一つ一つ見ていくと二段目の一つ目に、
『君が素直になりますように』
という願い事があった。
「これは……」
僕は絵馬をあわてて裏返す。そこには
『咲来』
と書いてあった。僕はスピードを上げて一つ一つ目をくばった。
『君が無理しませんように。咲来』
『君が人に興味を持ちますように。咲来』
『君が一日でも早く完ペキにもどりますように。咲来』
『君にもっと興味をもってもらえる自分になれますように。咲来』
その後もまだつづいていた。
『君が一人で着がえれるようになりますように。（笑）咲来』
『君が学校で友達がいーっぱいできますように。咲来』
僕の目はまた涙でいっぱいになっていた。
『君が人を支える仕事につきますように。咲来』
咲来は僕に向けての願い事を毎日毎日書いていた。きっと五時に帰っていたのは、そのためだろう。僕は涙があふれだす。涙があふれだしながらも最後の絵馬に目をくばった。
そこには…
『君の名前を呼べますように。咲来』
この言葉には彼女の思いが強くこめられているのだろう。この絵馬で彼女の僕への願い事は終わっていた。
「咲来」
僕は涙目で笑った。優しくつつみこむように笑った。そして僕も絵馬を取り書きこんだ。
『咲来に名前を呼んでもらえますように。一翔』
最後の『翔』の文字はにじんでいた。

四ヵ月後、僕は高校を卒業し、今日は看護師になるための入学式だ。
朝早くに起き、自分で朝食をつくり、母さんと食べた。事故にあった朝とは比べものにならないぐらい気持ちのいい朝だった。
「いってきまーす」
リビングまでとどくような声で言った。空は青くて、小鳥がなく、ドアの外へとかけだした。軽く急いで会場へと向かった。
あの日の川辺の桜をながめながら橋まで軽く走った。思った通り春に橋から見る景色は最高だった。桜が満開に咲き、川が静かに流れている。僕はこの時、彼女に
「咲来の夢。僕がかなえるよ」
と誓うと桜の花びらが風でいっきにまいあがった。
僕のポケットには一枚の桜の花びらが入っていた。

《優秀賞・一般の部》

随想部門

思いやる気持ち

内倉　一綾

「相手のことを思いやる」ということは、相手に対して配慮をすることだ。でも、道ですれ違う人や、同じ電車に偶然乗り合わせた人など、自分にとって身近でない人に対して、それを行えているだろうか？

旅行に行った先で、電車に乗った時に、泣いている子ども達がいた。小学生くらいの子ともう少し小さい子、そして一番小さい子の三人の全員が泣いていたので、車内に泣き声が響いていた。私は乗車してすぐに「他の車両に乗ればよかったな」と思った。その中の一番小さい子の泣き声が大きくて、車内の人達はみんなその子を見ていたが、父親っぽい人は子どもたちに何も言わずに、疲れた感じで黙って座って、ずっと一点を見つめていた。見かねた初老の男性が、父親と思われる人に「ちょっとあんた、この子らの親じゃろが？　さっきから何ね？　親なら電車の中で泣かんように、早よう注意しんさい」と強い口調で言った。車内の人達も、同じ気持ちだったのか、その状況をみんなが見ていた。声を掛けられた男性は、ハッとしてその初老の男性に「すみません。さっき病院で妻が亡くなり、これからどうしていいのかわからず」と小声で言った。それまで好奇の目でその状況を見ていた私は、自分自身が恥ずかしくなった。

しばらく車内は静まり返っていたが、その注意した初老の男性が、「しっかりしんさいよ」と言って父親の肩に優しく手を置いて、次の駅で降りて行った。それに続くように電車を降りる人達が、その父親に「大変やが頑

張るんやで」、「辛いが子どものためにしっかりね」と声を掛けていた。子ども達の頭をなでて、お菓子を渡している人もいた。みんなそれぞれが今自分にできることをしていた。それが伝わったのかわからないが、父親はタオルで目を押さえていた。私や私の家族はその父親に声を掛けられなかったが、家族が会釈して電車を降りると、会釈を返してくれた。

事情を説明すればその原因がわかり、そうなった理由が理解できるが、ほとんどの場合が説明できない。電車で乗り合わせた人に、事情を説明できる状況ではないからだ。でも相手を思いやることは出来る。相手の状況がわからなくても、そうなった原因を想像するだけで、相手を許せる気持ちが沸いてくる。人はそれぞれ事情を抱えて生きているが、相手のことを考えて行動するだけで、思いやりが相手を救うことがある。

いつも通学時に通る、駅までの途中にある整骨院の前で、数名のお年寄りが病院の診察時間が始まるのを待っている。病院の前は朝日が当たるので、反対側のマンションの日陰に座って待っているのだが、老人なので話す声が大きく、話の内容がいつも聞こえてくる。会話の内容は、昨日の野球の試合の結果や、スーパーのお得情報などのいろいろだが、みんなが大声で話をしているので「会話の内容を聞かれて恥ずかしくないのかな?」と疑問に思っていたが、もし家に帰っても家族がおらず、一日中誰とも話す相手がいなかったとしたら、病院の待ち時間の会話がとても楽しいものに違いない。また若い時と比べて、聴力も落ちていて相手の声が聞きにくく、聞き返す言葉も全然違うので、会話が成り立っていないが、お年寄り達は楽しそうに話をしている。そう思うと、最初は「朝からうるさいな」と思っていたのが、そんな思いがなくなり、微笑ましくなった。相手のことを思い想像して、見る角度を変えただけで、私の思い込みが変わった。

それまでの私は、並んでいる列に割り込まれたら、意地でも阻止して自分が先に並んでいると言わんばかりに、自分本位で行動していたが、そんなことはどうでもよくなった。その人が、列に割り込んでも先に行かないといけない理由があったと思えば、気にならなくなった。急いでいて、ぶつかった人に対しても同じで、向こうが謝る前に「大丈夫ですか？」と言えば、「こちらこそごめんなさいね。あなたこそ大丈夫？」と言われた。相手のことを思って声を掛けたら、相手にも思いやりの言葉をもらえた。今までの私なら、言えなかったと思う。

相手のことを思いやるだけで、今までの見方が変わり自分本位な勝手な思い込みが消え、思いやりの連鎖が始まった。私が出来ることは限られているけど、自分に余裕がない時こそ、相手を思いやって行動できるようになりたい。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

随想部門

さようなら　あくまのわたし

今西　結花

わたしには3さいのおとうとがいます。いつもいっしょにあそびます。えがおでだきついてくるところがかわいくてだいすきです。でも、けんかもよくします。けんかになると、わたしはなかよくしていたときのてんしのきもちをわすれてしまいます。もっといやなきもちになれとおもっていやなことをいってしまいます。あくまのわたしです。すると、おとうとももっとひどいことをしてきます。わたしは、すごくいやなきもちになります。

あるひ、あくまのわたしはきがつきました。いやなことをされるのってこんなにつらいんだ。きっとおとうともおなじきもちなんだ。おかあさんはいつも、じぶんがされていやなことは、ひとにしてはだめといいます。てんしのときは、このやくそくをおぼえていて、まもれるようにがんばっています。もし、あくまのときにもこのやくそくをおもいだせたら、きっとけんかもはやくおわるとおもいます。これからは、このやくそくをいつでもおもいだせるようにしようとおもいました。だってもうしょうがっこうのおねえさんなんだから。

《優秀賞・一般の部》

詩部門

雨やどり

榊　れもん

長い　長い夏やすみが終わっても
足は上がらなかった

麦わら帽も
リュックも
納屋にしまったけれど
教科書も新しくなったけれど
足は上がらなかった

朝食はお茶づけ
デザートの瓜

それだけが命ささえた
あの夏
足は上がらなかった
ふらり　ふらふら

家族はききなれない日本語を駆使し
気をつかってくれた
がんばった日々があるのだからもういいと
この町には図書館もある
ときどきは行けるだろうか
静寂は　安心だ

なたね梅雨も
五月雨（さみだれ）も
夕立でも
時雨（しぐれ）でも
雨やどりは　必要だから

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

詩　部門

さとうさん　ありがとう

圓山　善久

ぼくはじゅくにいっている
たいふうのけいほうがでていてやすみだった
へやのいりぐちはまっくらだった
はしってママをおいかけたけどもういなかった
　ぼくはきゅうにさみしくなった
しっているひとがだれもいなくなってなみだがでた
　ないているとかいものがえりのおばさんがどうしたのときいてくれた
　ひとりぼっちのわけをおはなししたおばさんがいえにでんわしてくれてママがくるまでいっしょにいてくれた
　ママがきた
とびつきたかったけどはずかしいからちいさくママっていってをふった
　おばさんが
「いっしょにおはなしできてたのしかったよ」
　とハイタッチしてさっていった
　ママがみんなにたすけてもらってありがたいねとないていた
ぼくもあんしんしてまたなみだがぽろんとでた
　いえのでんわからおばさんにおれいのでんわをした
　おばさんのなまえはさとうさんっていった
　またどこかであえたらぼくからさとうさんこんにちはあのときありがとうってあいさつしたいな

《優秀賞・一般の部》

創作童話部門

あ・そ・ぼ

田邉　和代

「まわせ！　まわせ！」

ぼくはころがってきたボールを力いっぱいけった。ビューンとボールはへんなところにとんでいく。

「ケンタ、どこにけっとうねん」

ユウが口をとがらせる。

「ケンタがとってこいや」

ダイにいわれ、ぼくはボールがころがっていったほうにはしった。サッカーはすきだ。でも、あまり、じょうずじゃない。それに、三人でボールをけりあっているだけじゃつまらない。もっと、なかまがいたらいいのに……。

ボールは公園のはしのところにあった。ボールを手にとる。そのとき、だれかがみている気がした。そちらをみる。すこしはなれたベンチに、おなじとしごろの男の子がすわっている。ぼくと目があうと、モジモジとして、したをむいてしまった。なんか、へんなかんじ……。あの子、しっている。なんどもみかけている。いつもあのベンチにすわって、本をよんだり、けいたいゲームをしたりしている。公園にきているのに、ひとりぼっち。

「おーい、ケンタ、はやくしろや！」

ユウによばれ、みんなのほうにもどった。あの子のことはわすれた。

つぎの日からあめがつづいた。ほうかご、ぼくらはいえのなかですごした。

すうじつご、あめがあがってひさしぶりにボールをもって、公園にいった。チラッとべ

ンチをみる。いた！　あの子だ。すわってゲームとしている。また、ひとり。ともだちいないのかな？
「ケンタ、いくで！」
　パスのやりあい。ダイのけったボールがコロコロとあの子のまえにいった。ぼくはそのあとをおう。あの子がボールを手にとった。
「ありがとう」
　さしだされたボールをうけとった。
「なぁ、いつもひとり？　サッカーすき？　よかったら、いっしょにサッカーやらへん？」
　きっと、この子、サッカーしたいのじゃないかな？　そんな気がして、おもいきってさそってみた。
　きっと、よろこんで、なかまにはいる……と、おもった。だのに、この子はキョトンとしたかおをすると、かおをよこにふり、うつむいてしまった。
　なんだ。やりたくないのか。へんなやつ！
　ぼくはユウたちのところにもどると、ボールをけった。
「おとなりからたくさんクリをもらってん。バアチャンところにとどけてくれるか？」
　ママにたのまれた。バアチャンはとなり町にすんでいる。バスで七つめのていりゅうしょ。なんどもいったことがある。ぼくはクリのはいったカバンをもつと、でかけた。

　家のちかくの大どおりからバスにのる。のったとたん、けいたいゲームをとりだし、ゲームをはじめた。
「お、いた。モンスター」
　バスの中でのじかんつぶしにはもってこいだ。むちゅうになって、ゲームをしていた。
「あ、にがした。ちくしょう」
　そのとき、ふと、バスのアナウンスが耳にはいった。ドキッとする。きいたことのないちめい。まどの外をみる。みたのことのないけしき。おりるのをわすれていた。あわて

て、ボタンをおし、つぎのバスていでおりた。
ここはどこだろう？　いくつぐらいのりこした？　だれかにきけばわかる？　だけど、だれもいない。どうしよう……
こまっていたら、きゅうに十人ほどの人がかどをまがってきた。ぼくはそちらにはしった。
「すいません。ここはどこですか？　○○町にはまっすぐいけばいけますか？　とおいですか？」
その人たちにきいた。だが、その人たちはキョトンとしたかおをした。そして、わけのわからないことばではなしはじめた。
「がいこくの人や！」
なにかきいてくる。わからない。
「○○町、いきたい」
ひっしでいってみた。だが、やはりだめ。むこうもひっしできいてきてくれるが、てんでわからない。どうしたらいいんだ？　ことばがつうじない。おもいがつうじない。ふあんがひろがる。もどかしい。なきだしそう……
そのとき、ひとりの人が、
「コーバン」
と、いった。
コーバン？　ひょっとして、こうばん？　おまわりさんのいるこうばん。こうばんにつれていってくれるというのか？　ぼくははげしくうなずくと、
「こうばん！　こうばん！」
とさけんだ。がいこくの人たちはぼくの手をとり、こうばんにつれていってくれた。ことばが、おもいが、つうじた！
こうばんのおまわりさんにバアチャンちへの道じゅんをおしえてもらい、ぶじバアチャンちにたどりついた。バスていをふたつのりこしていた。
バアチャンにクリをわたし、かえりのバス

にのった。こんどはゲームなどしない。ちゃんと家のちかくのバスていでおりた。そのとき、バスのまうしろにみたことのないバスがとまった。車体に「あおぞらがくえん」とかいてある。どこかのスクールバスかな？
なにげにみていると、男の子がひとりおりてきた。あの子だ。いつも、公園のベンチにひとりですわっている子。

「バアチャン、クリよろこんでくれたか？」
「うん、すごく」
ゲームしていて、のりこして、まいごになったことはひみつ。かっこうわるいし、おこられるのにきまっている。
「あ、ねえ、あおぞらがくえんてなんや？」
わだいをかえた。
「あおぞらがくえん？　あ、ああ、あそこは耳にしょうがいのある子がいく学校や」
「しょうがい？」
「耳がきこえないのよ」
「え？　耳が……きこえない？」
あの子、きこえてなかった？
あのとき、へんじがなかったのも、うつむいてしまったのも……
がいこくの人にかこまれて、ことばがつうじなかっただけで、ふあんでしかたなかったのに、こころもとなくて、イライラしてしまったのに……
「じゃあ、どうやって、ほかの人とおはなしするんや？」
「それはな……」
きょう、ぼくたちはボールをもって、公園にいく。あの子はいつものベンチでマンガをよんでいる。そして、ときどき、ぼくたちのほうをみる。
ほんとうは、いっしょに、サッカーがしたいんだ。きっと、ぜったい。
ポンとぼくはあの子のほうにボールをけった。コロコロころがっていく。あの子は気づき、ボールを手にとった。ぼくたちはかけよ

る。あの子はボールをぼくにとさしだした。ぼくはゆっくりと、手を、あの子のまえにだした。ていねいに、たしかめるように、手をうごかす。いっしょうけんめいにおぼえた手でのおはなし。

「あ・そ・ぼ」

あの子はびっくりして、かおをあげ、ぼくたちをみつめた。それから、目をかがやかせると、ニッコリとわらった。

あの子の手が、へんじをくれる。

「うん。あ・そ・ぼ」

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

創作童話部門

ポワポワの魔法

山脇　愛理

はりねずみのハリスくんは今日も元気いっぱいたくさん遊びます。今日はお母さんが久しぶりに町へ連れていってくれるそうです。ハリスくんはとても楽しみになってきました。

「うん。とっても楽しみ。前に行ったときより僕はずっとずーっと大きくなっているんだから、きっと楽しいはず！」

町には、ハリスくんが見たことのない物がたくさんあります。このキラキラとしたものはなんでしょう。

「おじさん、この、キラキラしたものって…何なの？」

「これはシーグラスっていうんだよ。ガラスが、水の中で削られてぴかぴかになったものなんだ」

ハリスくんにはよくわからなかったけれど、すばらしい物だということはわかりました。

ハリスくんは他にもたくさんのものを見ました。お母さんが「離れないで」と言うのも聞かずに……。

「あれ？　あれれれれ？」

気がつけばお母さんはいませんでした。そう、ハリスくんは迷子になってしまったのです。

「お母さん、お母さぁぁん！」

ハリスくんはまだ子どもです。不安でたまりません。その時、後ろから声がしました。

「やぁ、お前、どうしたんだい？」

ふり返ってみると、そこにはうさぎの少年

がいました。
「お兄ちゃん、お母さんがいなくなっちゃったんだ……。どうしよう、お母さん……」
「よしよし、泣くな、泣くな。一緒に探してやるから、オイラにまかせとけって。泣いてもいいことないぞ、笑ったら母ちゃん、みつかるぞ」
　そう言いながら優しく頭をなでてくれました。
「オイラはラビアンっていうんだ」
　ハリスくんはすっかりラビアンが好きになっていたので、すぐ泣きやみ、そして笑いました。
「お前は母ちゃんとどこに行こうとしてたんだ？覚えてるか？」
「えーと……八百屋さんとお菓子屋さん……」
「じゃあひとまずそこに行くか」
　二人はまず八百屋に行くことにしました。
　八百屋さんにはたくさんの人がいました。そこに、お腹のふくらんだ猫がいます。お腹の中に赤ちゃんがいるようです。でも、そのせいか、りんごやみかんをゴロゴロと落としてしまっていました。するとラビアンは「ちょっと待っとけよ」と言うと拾うのを手伝いに行きました。ハリスくんにはその姿がすごくカッコよく見えて、急いで自分もかけつけると、一生懸命手伝いました。そして、すべて拾い終えると、猫は言いました。
「ありがとう。とても助かったわ。ぼうやもありがとうね。私はキャシーっていうの。何かお礼をしたいのだけれど……」
　するとラビアンは言いました。
「いやいや、大丈夫だよ。役に立てて良かった。ところでここにコイツの母ちゃん来たかどうか知ってるか？」
「うーん……そうねぇ、ものすごく慌ててたはりねずみがいたわよ。急がなきゃ、ちゃんと覚えてるかしらって言っていたわね」
「あっ！」

ハリスくんは何かに気づいたようです。
「そうだ、迷子になったら行く場所をお母さんが言ってた！　うーん、どこだっけ？」
「どの方面へ行っていたのかは？」
「ごめんなさい。わからないわ。ごめんね、ぼうや、ついていきたいとこだけれどあまり歩けないから……。はい、これあげるわ。お腹がすいたらこれを食べなさい。この子達も優しく育ってほしいわ」
　そう言うとキャシーはハリスとラビアンにりんごを渡しました。
　キャシーと別れた二人はお菓子屋さんに行くことにしました。しかし、二人のお腹からはグーっとあの音が。気がつけば今はもうお昼です。二人はりんごを食べることにしました。町を少しはずれた大きな木の下で
「いっただっきまーす！」
　りんごを食べ始めました。りんごはみつがたっぷりでとても甘いです。むしゃむしゃ食べていると上からバサバサッと音がしました。見ると、おじいさんふくろうが飛んでいます。
「おじいさん、どうしたの？」
　ハリスくんが聞くとふくろうは言いました。
「いやぁ、最近ふとんがなくなってしまってのう……。夜寝るのが寒いから暖かくて気持ちのいい昼に外で寝てるんじゃよ。じゃがのう、わしは寝相が悪いから落ちてしまうんじゃ。フォッフォッフォ、今日で四回目じゃ。フォッフォッフォ……」
「ふとんがあれば夜寝られるんだな……」
　とラビアンが考えこむと、ハリスくんが
「僕、作れるかもしれない！」
　と言い、周りの葉っぱを背中の針で器用にとっていきます。ラビアンも不思議そうに葉っぱを集めました。たくさんの葉っぱが集められると、ハリスくんは少し遠くへ行き、たくさんのアリを連れてきました。
「このアリさん達は、葉っぱと葉っぱをつな

げて家をつくるんだよ。りんごをあげたら、葉っぱをつなげてふとんにしてくれるって」
「でかしたぞ、すごいじゃないか！」
ラビアンにほめられてハリスくんはうれしくなりました。みるみる間に葉っぱは、緑色のふとんになりました。
「はい、おじいさん。出来たよ。これでしっかり休んでね。お母さんが、寝る子は育つって言ってたよ」
「君達、ありがとう。感謝するよ。わしは物知りじゃと言われておるふくすけじゃ。何か知りたいことでもあればいつでもおいで。あれ、ぼうやはさっき助けてくれたはりねずみのお母さんにそっくりじゃのう……」
ハリスくんとラビアンは顔を見合わせました。きっとハリスくんのお母さんです。
「おじいさん、その人、どっちに行った？」
「うぅーむ……すまんのう。またすぐ寝てしまって……わからんのじゃ」
「そっか……じゃあお菓子屋さん行くか」
二人はふくすけと別れてお菓子屋さんへ行くことにしました。
お菓子屋さんに行くとりすの女の子が泣いていました。ハリスくんより年下のようです。
「お母さぁん……お母さーん」
どうやらこの子も迷子になってしまったようです。ハリスくんは近づいて言いました。
「僕はハリス。君、大丈夫？」
「お母さんとはぐれちゃって……。ここで集まる予定なの」
「よし、じゃあ僕達と待っておこう。ほら、泣かないで、笑ったらお母さん来るよ」
ラビアンは目を丸くして、その後笑いました。自分がハリスくんに言った言葉と似ていたからです。女の子は泣きやみ、言いました。
「私、リンダ。大きいお兄ちゃんは？」
「オイラはラビアンだ。よろしくな」
三人は楽しく話をしました。すると、リンダがこんなことを言いました。

「あぁ、私って幸せね。おもちゃ屋さんに行けたし、こんな優しいお兄ちゃん達と友だちになれたんだもん」
　ハリスくんもラビアンもにっこり笑顔。すると、ハリスくんは急にさけびました。
「そうだ、おもちゃ屋さんだ！」
　ハリス君とお母さんの待ち合わせ場所はおもちゃ屋さんだったのです。まもなく、
「リンダちゃん！」
　と、リンダのお母さんがやってきました。
「あのね、お兄ちゃん達が一緒に待ってくれたの。楽しかったんだよ」
「うんうん、あなた達、ありがとうね。私達の家はすぐそこだから、いつでも家に来て、またこの子と遊んでね」
　リンダ達と別れた二人はおもちゃ屋さんへ向かいました。
「あのね、ラビアン。僕ね、今日ね、とっても心がポワポワっとしたんだ。猫のお母さんとかふくろうのおじいさん、さっきの女の子。笑った顔が、とってもうれしいんだよ。すごいし、楽しいし、不思議だね」
「そうだな、それが助け合うっていうか優しさなんじゃねぇのかよ。ポワポワの魔法…みたいな……。まあオイラにもよくわからないな。そうだ、さっきお前カッコよかったぞ、オイラの真似をしたんだなっ」
　二人は楽しく話をしながらおもちゃ屋さんへとたどりつきました。そこには、ハリスくんのお母さんともう一人……。
「ゲッ、母ちゃん！」
「あっラビアン、お前はまたどっか行って！」
　ハリスくんにはよく意味がわかりません。するとお母さんがこっそり教えてくれました。
「ここで待っていたらラビアンくんのお母さんと会ってね、あの子も迷子だったのよ」
　ハリスくんは驚きました。自分のことより僕のことを心配して、お母さん探しを手伝ってくれたなんて！

「ラビアン、今日はありがとう。今日のラビアン、とってもカッコよかったよ。僕もラビアンみたいになるから。また遊ぼうね」
「おぅ、お前も今日一日で一気に成長したよ。また遊ぼうな、約束だぞ」
おもちゃ屋さんは電灯でキラキラとしていました。
そして数日後。
「大丈夫？もう手伝えることない？」
「うん、助かったよ、ありがとう」
ハムスターのおばあさんを見送るハリスくん。そこに……
「おぉーい、ハリスーっ」
ハリスくんは笑顔でふりむきました。
「ラビアン！リンダと一緒にふくすけさんとこに行かない？」
今日もステキな日。心のポワポワ、増えるといいな。

平成29年度　人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発　行　平成29年12月
編　集　公益財団法人兵庫県人権啓発協会
〒650-0003
神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355
FAX 078（242）5360
発行者　兵　庫　県
公益財団法人兵庫県人権啓発協会
印　刷　㈱興正社

人権文化をすすめよう
再生紙を使用しています